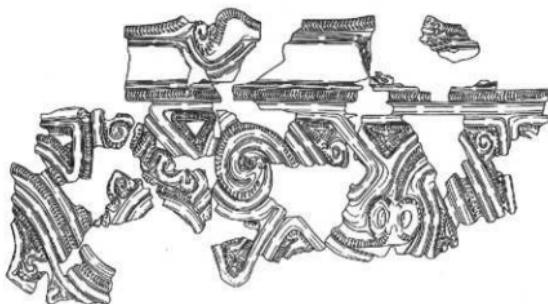


静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第118集

# 北ノ入A遺跡

平成10年度 東駿河湾環状道路建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書



1999

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第118集

# 北ノ入A遺跡

平成10年度 東駿河湾環状道路建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



北ノ入A遺跡調査区全景



北ノ入A遺跡出土遺物

# 序

本遺跡からは、尖頭器・スクレイバーなどの石器類や、縄文時代の早期・前期に属する土器あるいは時代も下降して土師式土器なども若干出土したが、主として縄文時代中期中葉の頃の土器・石器類が多量に検出されている。したがってこの頃の文化を示す上で重要な遺跡と言つてよいであろう。しかも、土器は膨大な数量に達しており石器も亦、石匕・打製石斧・磨製石斧・石錐または石棒など多種にわたっている。そして住居跡も6棟分ほど明かされている。

調査関係者によりこれらについて丹念に整理し、ここにようやくにして刊行することができた。

思うに県内にはこの頃の関係資料はかなり多く知られているが、今回の報告書により新たに重要な資料が加わったわけであり学界を裨益するところ甚大であろう。

平成11年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎 藤 忠

## 例 言

- 本書は三島市徳倉845-1に所在する北ノ入A遺跡の発掘調査報告書である。
- 調査は平成10年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部建設局沼津事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとで財団法人埋蔵文化財調査研究所が平成10年4月から平成10年7月まで現地調査を実施し、平成10年7月から平成10年12月まで整理作業を行った。
- 調査体制は以下のとおりである。

平成10年度

所長 斎藤 忠 常務理事兼総務部長 伊藤 友雄 調査研究部長 石垣 英夫  
調査研究部次長心得兼一課長 佐野 五十三  
調査研究員 井上 隆 望月 由佳子

- 本書の作成、執筆は職員が分担しておこなった。執筆分担は目次に（ ）で示した。
- 整理作業の迅速化を図るために、石器実測の一部を㈱シン技術コンサルに委託した。
- 本書の編集は財団法人埋蔵文化財調査研究所があたった。
- 本調査に関わる資料は、すべて静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

## 凡 例

本書の記載については以下の基準に従い統一を図った。

- 調査方眼設定は、国家座標（平面直角座標WGS系）の軸線を基準に、  
国家座標（X = -94540.00・Y = 38030.00） = (A・1) と設定した。
- 方位は上記のX軸に従った。
- 出土遺物は土器：P、石器：S、礫：Rの略号に通し番号を付けた。
- 石器の実測は原則として第三角投影法に拠った。
- 出土遺物の実測図の縮尺は、土器・土製品1/2・1/3・1/4、石器4/5・1/2・1/3・1/10とし、各図にスケールを付している。また、実測図中の破線は破損を、石器の|——|は磨面、|——|は打痕を示す。
- 挿図中の面は、原則として真北を造構図面上とし、特別変更のある場合、方位により北方向を示した。縮尺は各図のスケールに示すとおりである。
- 土層・土器の色調は新版『標準土色図』（農水省農林水産技術会議事務局監修1997）を基準にした。
- 法量は特に指示のない場合（ ）は推定値、〔 〕は残存値を示す。



岩石和名	岩石英名	略号	岩石和名	岩石英名	略号
黒曜石	Obsidian	Ob	輝石安山岩	Pyroxene-Andesite	An
ホルンフェルス	Hornfels	Hor	玄武岩質溶岩	BasalticLaba	La(Ba)
流紋岩	Rhyolite	Rhy	デイサイト	Dacite	Da
頁岩	Shale	Sh	鞍山岩質溶岩	AndesiticLaba	La(An)
片状細粒安山岩	Fine-grainedAndesite	FAn			
緑色凝灰岩	Green-Tuff	GT			
緑色片岩	Green-Schist	GS			
中粒砂岩	Medium-Sandstone	MSS			
細粒砂岩	Fine-grainedSandstone	FSS			
珪岩	Quartzite	Qz			

# 目 次

巻頭カラー（北ノ入A遺跡調査区全景・北ノ入A遺跡出土遺物）

## 序

### 例言・凡例

第1章 調査に至る経緯（井上）	1
第2章 遺跡の位置と環境（井上）	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境（静岡県内の勝坂期の集落）	3
第3章 遺跡の概要（井上）	5
第1節 調査の方法と経過	5
第2節 土層堆積状況	8
第4章 縄文時代の遺構と遺物（井上・栗木）	10
第1節 縄文時代中期中葉の遺構（井上）	10
第2節 縄文時代の土器・土製品（栗木）	23
第3節 石器（栗木）	33
第5章 調査区内における遺物分布状況（井上）	43
第6章 調査の成果と課題（井上）	61

# 挿図目次

第1図 東駿河湾環状道路関係遺跡位置図	2	第21図 土製品分布図・実測図	32
第2図 静岡県内の勝坂期集落遺跡	5	第22図 石器実測図1	35
第3図 試掘・確認調査範囲	6	第23図 石器実測図2	36
第4図 調査区と調査深度	7	第24図 石器実測図3	37
第5図 土層柱状図	9	第25図 石器実測図4	38
第6図 遺構全体図	11	第26図 石器実測図5	39
第7図 S B-1	16	第27図 石器実測図6	40
第8図 S B-2	17	第28図 出土石器組成グラフ	42
第9図 S B-3・4	18	第29図 縄文時代中期土器分布全体図	45
第10図 S B-5・6	19	第30図 接合資料土器分布全体図	46
第11図 炉：S X-1・S X-2・S X-3	21	第31図 石器分布全体図	47
		第32図 S B-1 土器分布図	48
第12図 ピット群1・2	22	第33図 S B-1 石器分布図	49
第13図 縄文時代早・前期土器と分布図	24	第34図 S B-2 土器分布図	50
第14図 勝坂式土器模式図	25	第35図 S B-2 石器分布図	51
第15図 縄文時代中期中葉の土器1	26	第36図 S B-3・4 土器分布図	52
第16図 縄文時代中期中葉の土器2	27	第37図 S B-3・4 石器分布図	53
第17図 縄文時代中期中葉の土器3	28	第38図 S B-5・6 土器分布図	55
第18図 縄文時代中期中葉の土器4	29	第39図 S B-5・6 接合資料土器分布図	57
第19図 縄文時代中期中葉の土器5	30	第40図 S B-5・6 石器分布図	59
第20図 縄文時代中期中葉の土器6	31		

## 挿表目次

第1表 東駿河湾環状道路関係遺跡	1	第7表 土器観察表4	29
第2表 作業工程表	5	第8表 土器観察表5	30
第3表 基本土層	8	第9表 土器観察表6	31
第4表 土器観察表1	25	第10表 土製品観察表	32
第5表 土器観察表2	27	第11表 石器観察表	41
第6表 土器観察表3	28	第12表 出土石器組成表	42

## 図版目次

図版1 遺跡の近景	図版9 繩文時代中期中葉の土器3
図版2 SB-1 完掘状況	図版10 繩文時代中期中葉の土器4
SB-1 炉残存状況	繩文時代早期・前期の土器
図版3 SB-2 完掘状況	土製品
SB-2 炉残存状況	図版11 尖頭器・石鎌
図版4 SB-3・4 完掘状況	石匕
SB-3 炉残存状況	図版12 スクレイパー類・石核
図版5 SB-5・6 完掘状況	石斧
ピット群2	図版13 磨石・敲石・石錐
図版6 SB-6 炉残存状況	石皿・石樽
ピット群1	図版14 伐操作業風景
SX-2 炉	伐根作業風景
SX-3 炉	遺物検出状況
遺物出土状況1	住居跡検出作業風景
遺物出土状況2	整理作業風景1
図版7 繩文時代中期中葉の土器1	整理作業風景2
図版8 繩文時代中期中葉の土器2	

# 第1章 調査に至る経緯

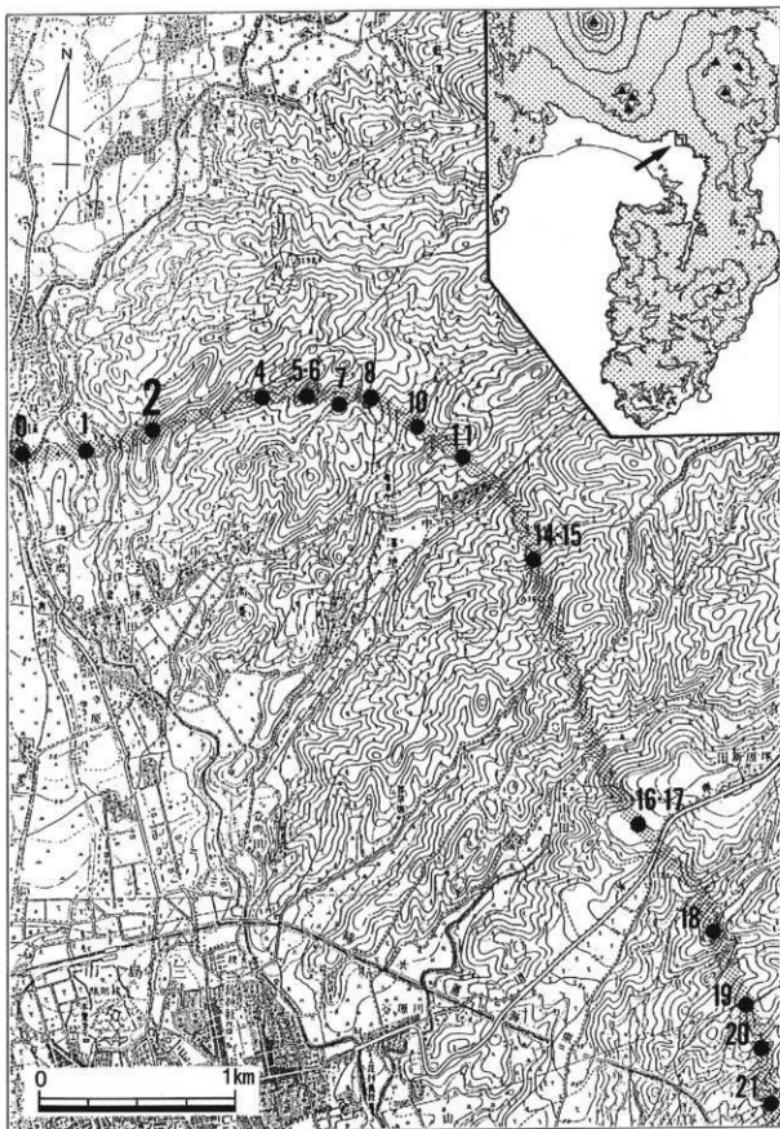
本調査報告は、東駿河湾環状道路建設工事に伴う一連の発掘調査の一つであり、その全体の経緯は既刊各報告書にあるので本報告では略す。北ノ入A遺跡の調査は、まず当財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成8年3月に $2 \times 2$ mのテストピットを5ヶ所設定して試掘調査を行い、礫・磨石等の石器を検出した。次にこれを受けて平成10年4月に確認調査を行い、発掘範囲を確定し、同年5月より本調査に入り、6月までの約2ヶ月間、現地調査を実施した。

なお、北ノ入A遺跡の三島市遺跡地図における登録はNo.106であり、No.109の北ノ入B遺跡と共に縄文時代早期から中期の遺物散布地として認識されていた。また、遺跡に隣接する三島市立北上小学校の造成時に土器などが採取できたという地元市民の話を聞いている。

試掘時には「No.2地点」と通称しており、これは東駿河湾環状道路の敷設にあたり、建設省中部建設局沼津事務所の委託により、通過する箇所に関して遺跡の確認調査を三島市教育委員会が行った際の整理番号である。また、本調査地点を北ノ入「A」とするか「B」とするかについて三島市教育委員会との間に協議がもたれ、その結果「北ノ入A遺跡」と呼称することに決定した。

第1表 東駿河湾環状道路関係遺跡

各市町村 整理番号	遺跡名	面積 (m <sup>2</sup> )	内 容	備 考	報 告 書
三島市0				調査予定	
三島市1	表B			調査予定	
三島市2	北ノ入A	498	縄文	H10本調査、H10整理	『北ノ入A遺跡』1999 本報告書
三島市3				三島市対応該当外	
三島市4	長平衡平	1,040	縄文	H8本調査、H8整理	『長平衡平遺跡』1998
三島市5	小池	5,310	旧石器～縄文	H9本調査、H9整理	『小池遺跡』1998
三島市6					
三島市7	俵倉B	3,500	旧石器～縄文	H8本調査、H9整理	『俵倉B遺跡』1998
三島市8	上ノ池	200	旧石器～縄文	H7-H8本調査、H9整理	『上ノ池遺跡』1998
三島市9			遺跡なし	H6確認調査	『静岡県三島市文化財年報 第6号』1994
三島市10	八田原	14,000	旧石器～縄文 中・近世	H7本調査、H8整理	『八田原遺跡』1997
三島市11	加茂ノ洞B	7,233	旧石器～縄文	H6本調査、H7整理	『加茂ノ洞B遺跡』1996
三島市12			遺跡なし	H5確認調査	『静岡県三島市文化財年報 第6号』1994
三島市13			三島市対応該当外		
三島市14	五百司	1,140	集石	H5試掘調査	『焼場遺跡B地点・五百司遺跡』1996
三島市15	焼場	5,600	旧石器～縄文	H4-6本調査、H5-6整理	『焼場遺跡A地点』1994
三島市16	下原	13,975	旧石器～縄文 中・近世	H5-6-9本調査	『下原遺跡I』1995 『下原遺跡II』1996
三島市17				H6-7-9整理	『下原遺跡III』1998
三島市18	押出シ	7,250	縄文	H8-9本調査、H10-11整理	『押出シ遺跡 考査編』1999
三島市19	生茨沢	3,050	旧石器～縄文、古墳	H9-10本調査、H10整理	『生茨沢遺跡』1999
三島市20	中峯	1,446	旧石器～縄文	H9本調査、H9整理	『中峯遺跡』1998
三島市21	桧林A	14,477	旧石器～近代	H8-9本調査、H9整理	『桧林A遺跡』1998



第1図 東駿河湾環状道路関係遺跡位置図  
(原図: 昭和22年発行 1/25,000)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

北ノ入A遺跡は三島市街地の北方、箱根外輪山の西麓に形成された丘陵端部に位置している。箱根西麓の丘陵は、箱根古期外輪山が箱根山第3期の活動に伴う火碎流堆積物によって覆われ、さらに、富士火山の降灰が厚く堆積して形成されたものであり、東麓に比して緩やかな傾斜を見せる。その斜面を境川、沢地川、山田川、来光川といった河川が南西方向に流れ、大場川、狩野川に注いで駿河湾に至っている。丘陵部の小地形は著しい浸食作用により形成された小支谷群の中に浮かぶ痩せ尾根となり、その末端部は小尾根を八手状に分岐する入組んだ地形を呈する。本遺跡も境川と沢地川の間の丘陵が浸食を受けて形成された南方向にのびる痩せ尾根上に位置しており、標高は約100mにあたる。

周辺の土地利用を新旧の地形図を参考に考察すると、明治時代後葉から昭和40年代頃までは尾根上には針葉樹、広葉樹林が植生し、一部畑地がみられ、谷部は水田として利用されていたが、昭和40年代後半以降、宅地化が進み周辺の景観は一変したようである。しかし、本遺跡は周辺の学校やゴルフ練習場建設に伴う開発からも取り残された雑木林として存在していた。

### 第2節 歴史的環境（静岡県内の勝坂期の集落）

箱根西麓地域においては約3万年前、後期旧石器時代から人間の生活痕跡が確認できる。縄文時代の遺跡は約300を越え、特に前期・中期のものが多くの確認されている。そういった当地方の遺跡の概要については、各市町村史、発掘報告書にくり返されているので本報告では省きたい。今回調査の実施された北ノ入A遺跡は、後述のように縄文時代中期中葉を主体とする遺跡であり、ここでは歴史的環境として県内の縄文時代中期中葉（勝坂期）の住居跡が確認された遺跡について概観することにした。なお、多くの文献で勝坂期を中期前半として取り扱っているが、前半は五領ヶ台期を含むため、以後本報告書では勝坂期を中期中葉と表記する。

#### 1長者平遺跡 袋井市豊沢 北方

袋井市東部、小笠沢川右岸に形成された東西に細長い段丘上に位置する。袋井市教育委員会が昭和53年から9次にわたる調査を実施し、中期前葉から後期前葉にかけての遺構・遺物が検出され、住居跡22基の中、5基が勝坂期に比定されている。

#### 2中原遺跡 掛川市高田 中原

掛川市北西部、原野谷川の河岸段丘上に位置する。掛川市教育委員会が昭和57年と62年に調査を実施し、住居跡1基が検出され、勝坂期に比定されている。

#### 3富士市天間沢遺跡 富士市天間

富士市の北西部、富士山西南麓に展開する扇状地の扇端湧水点に位置する。昭和35年以降、10次にわたる調査が実施され、早期から後期初頭にわたる遺物、14基の住居跡が検出され、2基が勝坂期に比定されている。

#### 4大芝原遺跡 沼津市鳥谷 大芝原

沼津市の西部、愛鷹山南麓に位置する。沼津市教育委員会が昭和33年に調査を実施し、調査前後の表探資料を含めて、中期初頭から後期前葉に及ぶ遺物、住居跡1基が検出されており、住居跡は勝坂期の可能性もある。

#### 5中見代II遺跡・6広合遺跡・7二ツ洞遺跡 沼津市足高 尾上

沼津市の北部、愛鷹山南麓の開析により尾根状となった丘陵に位置する。沼津市教育委員会が昭和60年から平成3年にかけて調査を実施し、縄文時代早期から後期に及ぶ遺構・遺物が検出され、中見代で住

居跡1基、広合で住居跡1基、二ツ洞で住居跡2基が勝坂期に比定されている。

**8 桜畠上遺跡 駿東郡長泉町上長畠 上野**

長泉町の西部、愛鷹山東南麓の丘陵先端部に位置する。詳細は不明だが、住居跡1基が勝坂期に比定されている。

**9 西願寺遺跡 (B地区) 駿東郡長泉町下長畠 西願寺**

長泉町の東部、愛鷹山東南麓の丘陵平坦部から丘陵の先端部に位置する。長泉町教育委員会が昭和50年に調査を実施し、勝坂期に比定される住居跡1基が検出されている。

**10 上山地遺跡 駿東郡長泉町 南一色**

長泉町の東部、黄瀬川右岸の南北に細長い平坦地に位置している。長泉町教育委員会が昭和62年に調査を実施し、勝坂期の住居跡27基を含む多くの遺構・遺物が検出されている。

**11 中村C遺跡 三島市佐野 片平山**

三島市の北部、比較的幅広な尾根上に位置する。三島市教育委員会が昭和61年に調査を実施し、縄文時代早期から中期の遺構・遺物が検出され、住居跡2基が勝坂期に比定されている。

**12 小池遺跡 三島市徳倉**

三島市の北東部、箱根西麓よりのびる痩せ尾根上に位置している。当研究所が平成9年に調査を実施し、5基の住居跡が検出され、そのうち4基を勝坂期に比定した。

**13 三島市千枚原 三島市老町田 千枚原**

三島市の北部、箱根西麓よりのびる痩せ尾根上に位置している。三島市史跡名勝天然記念物調査委員会が昭和23年に、三島市教育委員会が昭和38年に調査を実施し、中期前葉から後期前葉の土器群、8基の住居跡と5基の敷石住居跡が検出され、住居跡の一部は勝坂期の可能性もある。

**14 奥山遺跡 三島市市山新田 台崎**

三島市の東部、山田川と夏梅木川に挟まれた丘陵上に位置する。三島市誌編纂委員会が昭和29年に、三島市教育委員会が昭和57年に調査を実施し、早期から後期にわたる遺物、勝坂期に比定される住居跡3基が検出されている。

**15 源平山遺跡 三島市谷田 源平**

三島市の東部、箱根西麓よりのびる尾根の先端部に位置している。三島市教育委員会が平成2・3年に調査を実施し、源平山B・C地区から15基の住居跡が検出され、1基が勝坂期に比定されている。

**16 上黒岩遺跡・17柳沢B遺跡・18柳沢D遺跡 田方郡函南町桑原 上黒岩・柳沢**

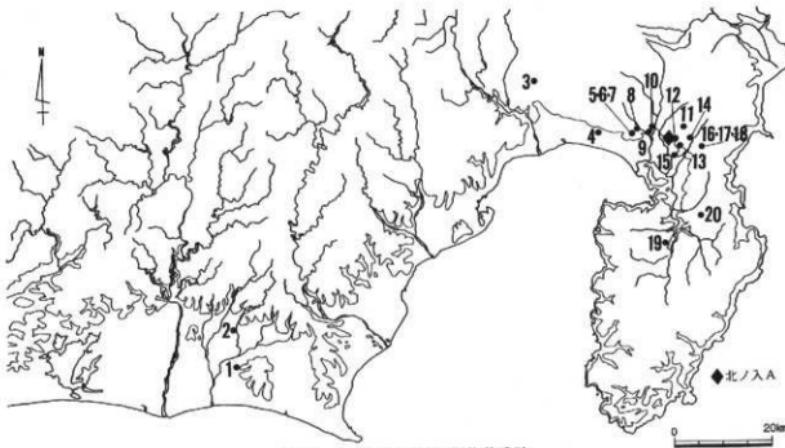
函南町の東部、箱根西麓の尾根上に位置する。函南町教育委員会が昭和59・60年に調査を実施し、縄文時代早期から中期にかけての遺構・遺物が検出され、各遺跡とも住居跡1基が勝坂期に比定されている。

**19 入谷平遺跡 田方郡修善寺町年川 入谷**

修善寺町の東北部、丘陵上の平坦面から南側の緩傾斜面に位置する。静岡県教育委員会が昭和41年に調査を実施し、住居跡10基が検出され、1基が勝坂期に比定されている。

**20 大塚遺跡 田方郡修善寺町大平 大塚**

修善寺町の南部、狩野川左岸の河岸段丘に位置する。昭和36年に第1次調査が実施され、昭和55年に修善寺町教育委員会が第2次調査を実施し、縄文時代早期から後期に至る遺構・遺物が検出され、住居跡1基が勝坂期に比定されている。



第3章 遺跡の概要

## 第1節 調査の方法と経過

調查方法

発掘調査を円滑にかつ正確に実施するために、確認調査時から国家座標 ( $X \cdot Y$ ) = (-94540.00, 38030.00) を原点A-1と仮定しX方向にアルファベット、Y方向に数字を順に付し遺跡全体に10mの方眼を設定してグリッドとした。また、同点を原点 ( $X \cdot Y$ ) = (0, 0) とし、標高とあわせ遺物の位置を示すために用いた。これらは全て地理座標に準じているため、南北方向にX軸を東西方向にY軸を取っている。

調査は、まず樹木の伐採から作業を開始した。伐採林の搬出は重機を使用し、大木以外は人力で抜根した。その他大きな木の根は抜根してしまうと遺構そのものを破壊してしまう恐れがあるのでそのまま残し調査を進めていく過程で徐々に撤去していった。なお、表土より遺構検出面まで掘削はすべて人力で進めた。遺構の実測、遺物の取り上げはトータルステーション用い、遺物には層別に土器=P、石器=S、礎=Rの略号と番号を付しX、Yの座標と標高(H)の記録をとり、コンピューターにも記録保管した。また、遺構図等については原則的に1/20の図面で記録した。

第2表 作物工程表

写真撮影は、中型カメラ（6×7）1台、小型カメラ（35mm）3台を使用した。

#### 調査経過

**試掘調査** 平成8年3月4日～18日 20m<sup>2</sup>

平成7年度末に試掘調査を行った。5ヶ所のテストピット $2 \times 2\text{ m}$ を設定して調査を行った結果、磨石・敲石等が出土し、縄文時代の遺跡であることが再確認された。

**確認調査** 平成10年4月16日～30日 101m<sup>2</sup>

試掘調査時には、山林のためテストピットを空けられる位置が制限され、遺跡の範囲、時期等が不明確であったため、今回の調査に先立ち、調査範囲内の確認調査を実施した。

樹木伐採後、尾根筋に沿って南北方向に $3 \times 3\text{ m}$ のテストピットを南からNo.1～No.7と7ヶ所設定した。この結果、南側のNo.1・No.2テストピットを中心に縄文時代中期の土器・打製石斧・磨石等が多数検出された。遺物の広がりを確認するためNo.1テストピットからNo.3テストピットまでを縦貫する幅1mのトレンチを設定して拡張したところ、No.3テストピットの南端まで濃密に遺物が検出された。

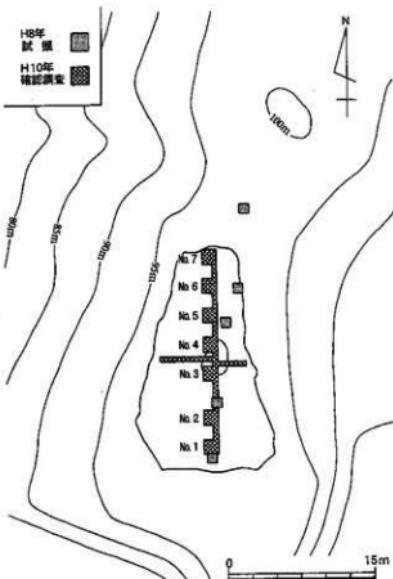
また、表土より旧石器時代とおもわれる尖頭器が1点出土したため、土層堆積の確認と旧石器時代の遺構・遺物包含層の確認を兼ねて縄文時代の遺物がほとんど出土しなかった北側のテストピットNo.4～No.7を南北に縦貫するように幅1mのトレンチを設定し、また、中央部にも東西トレンチを設定し、遺物包含層以下の土層の堆積状況を確認した。なお、この調査では尖頭器1点以外の旧石器時代の所産と思われる遺構・遺物は確認されなかった。遺跡北側は1・2層の堆積が薄く、遺物の出土も希なため、本調査対象区を南側のみに限定した。

**本調査** 平成10年5月1日～7月7日 498m<sup>2</sup>

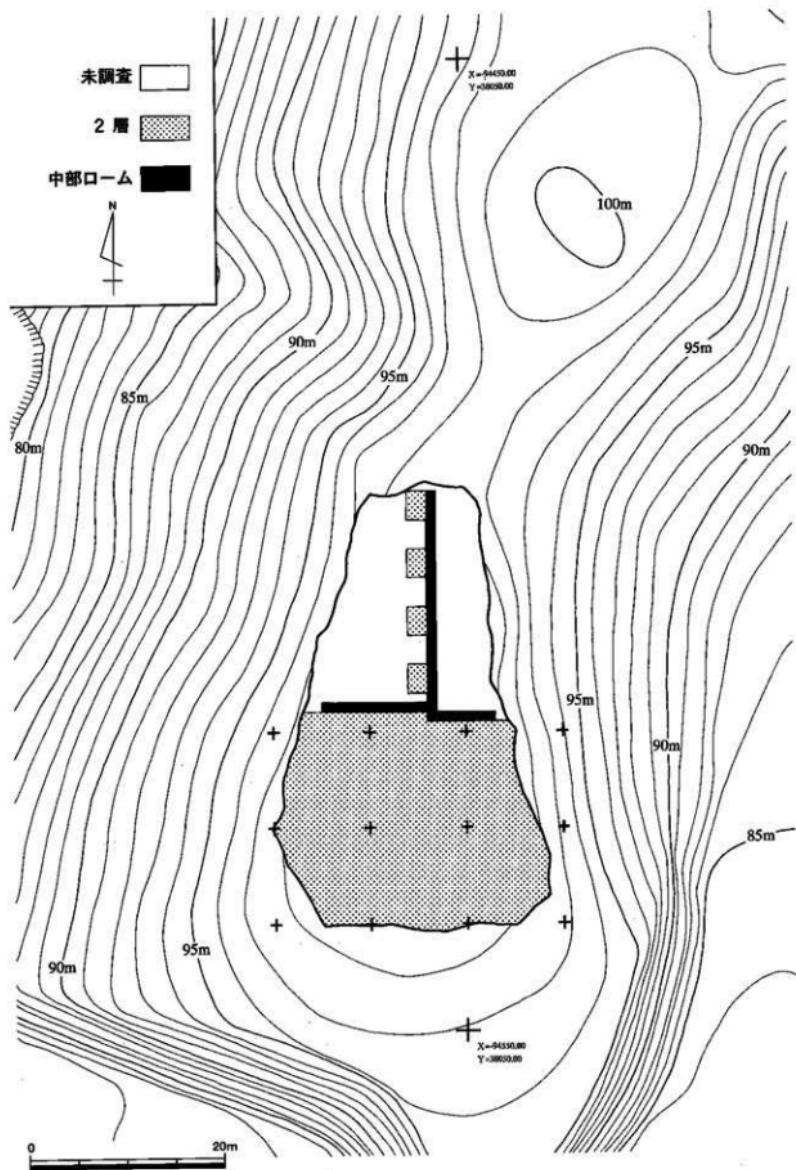
確認調査対象区の南半分を本調査対象区とし、表土から人力で掘削した。表土中から縄文土器が数多く出土されたが、畑の耕作痕が見られたことから、当初は遺構が耕作によって破壊されてしまっていると思われた。しかし、耕作土を除去した後に精査を行ったところ、搅乱の及んでいない下部の層にも遺物が多く出土することが分かった。

精査を進める中で、遺物が集中する地点、土の色調が暗い部分、ロームブロックを含まない部分などが見られたため、部分的にサブトレンチを設定し、遺構の有無を確認した。これにより、中央部分に重複する住居跡（SB-5・6）、その東側（SB-3・4）と南東側に住居跡（SB-2）の存在が確認された。また、焼土や炉石と考えられる石の検出から、南西側の住居跡（SB-1）が確認された。

調査段階では、調査区内の土色は遺物包含層、住居跡の覆土とともに褐色・暗褐色土で、非常に遺構の範囲が確認しにくい状況であった。このため、最終的にセメントブロックが多く含まれる層（2層）まで調査区全体を掘り下げた。また、ピット群や遺構に伴わない炉は耕作による搅乱など残存状況がきわめてよくなかったため、掘り方が確認できなかつた住居跡であると考える。



第3図 試掘・確認調査範囲



第4図 調査区と調査深度

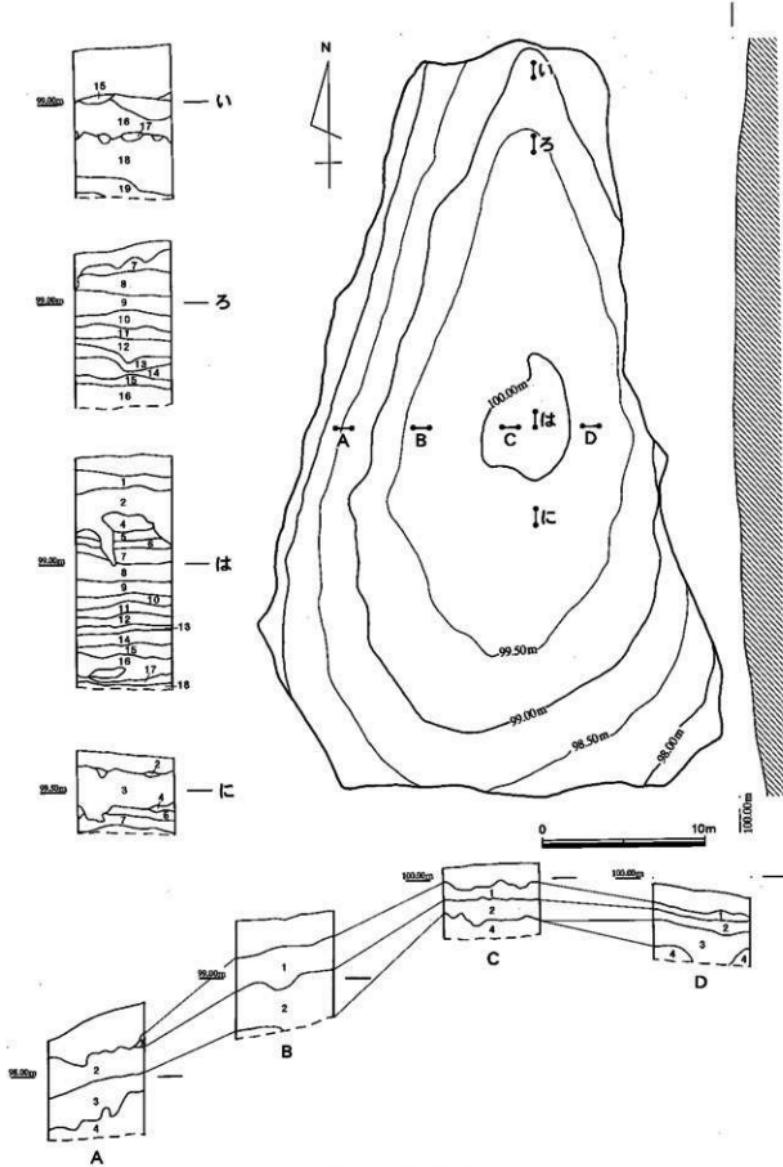
## 第2節 土層堆積状況（第3表・第5図）

第2章1節で述べたように遺跡は両側を谷に挟まれた痩せ尾根の頂上部に位置しているため土層の堆積状況は良くない。調査前の遺跡の状況は、雑木林であり表土は腐植の進んだ土である。表土を除去すると縦状に表土が残り畑の歴の残存であるところがわかり、現在は雑木林であるが、以前に畑として土地利用されていた時期があったことがわかる。

第5図に土層の柱状図とその位置を記載した。遺構・遺物の包含層は表土～2層であるが、本調査対象外とした北側での1・2層の堆積はわざめてまれであり、中部ローム層まで検出することができた。また、調査区全体にわたってニセロームより上層の箱根西麓の基本的な土層堆積は確認できなかった。このことは痩せ尾根という地形条件が堆積の薄さと浸食という形で現れているものであろう。

第3表 基本土層

<層名>	<色 虹>	<特長>
表土	暗褐色～黒褐色	現世農耕質土・旧耕作土。しまり、粘性なし。
1層	暗褐色	パウダーフォーム。径2mmの赤色黒色互り7をわずかに含む。しまり、粘性なし。
2層	褐色	ニセロームフロック主。赤色互り7、褐色互り7を含む。しまり、粘性弱い。
3層 SCIII ± 1	暗褐色～褐色	ぼそぼそした感じ。径5mmの赤色互り7、小石を含む。しまりなく、粘性弱い。
4層 SCIII ± 1	にぶい黄褐色	固いローム層。径2mmの赤色・褐色互り7、径5～10mmの黒色・褐色互り7を含む。しまり強く、粘性あり。
5層	にぶい黄褐色～褐色	固いローム層。径5～20mmの黒色互り7が多い。径6～7mmの青灰色互り7、径3～4mmの黒色・褐色互り7を含む。しまり強く、粘性あり。
6層 SCIII ± 4	褐色	非常に固い。径3～5mmの赤色互り7が多い。褐色・赤色・褐色互り7も多い。白色バニヨンを含む。しまり強く、粘性あり。
7層 BB IV	にぶい黄褐色	固いローム層。径3～5mmの黒色互り7が目立つ。径3～4mmの赤色・褐色・褐色互り7を含む。しまり強く、粘性あり。
8層	褐色	固いローム層。径2～7mmの黒色互り7が多い。径2～7mmの赤色互り7を含む。しまり強く、粘性あり。
9層 BB V～VI	にぶい黄褐色～褐色	固いローム層。互り7の量があまり多くない。径2～3mmの黒色・赤色互り7を含む。しまり強く、粘性あり。
10層	褐色	固いローム層。径1～2mmの赤色・褐色・青灰色・黒色互り7を含む。赤色互り7は径5mmのものがわずかに混じる。しまり強く、粘性あり。
11層 ベア互り7	褐色	赤色・褐色互り7の密麻帶。径2～3mmの赤色互り7が目立つ。径2～3mmの黒色互り7がわずかにある。白色バニヨンを含む。しまり強く、粘性あり。
12層	褐色	固いローム層。径2mmの赤色・黒色互り7が混じる。しまり強く、粘性あり。
13層 ベア互り7	褐色	赤色互り7が多い。黒色・褐色互り7を含む。しまり強く、粘性あり。
14層	褐色	固いローム層。径1～4mmの赤色互り7、径1～2mmの黒色互り7が混じる。しまり強く、粘性あり。
15層 ベア互り7	褐色	赤色・褐色・黒色・青灰色互り7が多い。白色バニヨンを含む。しまり強く、粘性あり。
16層	褐色	固いローム層。径2～3mmの赤色・褐色・黒色互り7を含む。しまり強く、粘性あり。
17層 ベア互り7	褐色	赤褐色の互り7の集積層。鉄錆状に発色する。ブロック状の堆積を示すところが多い。黒色互り7を含む。しまり強く、粘性あり。
18層 中部ローム層	褐色	固いローム層。径3～5mmの赤色互り7が目立つ。褐色互り7・黒色互り7・青灰色互り7・白色バニヨンを含む。しまり、粘性強い。
19層 カンジバニヨン	明赤褐色～橙色	橙色のバニヨンの集積層。下部に向かって密度が高くなる。上面に径3mmの赤色互り7を含む。しまり弱く、粘性なし。



第5図 土層柱状図

## 第4章 縄文時代の遺構と遺物

### 第1節 縄文時代中期中葉の遺構

今回の調査で、住居6軒以上、炉3、ピット群2を検出した。遺物の出土状況、炉・住居跡の形態等から、これらの遺構すべてを縄文時代中期中葉と認識した。しかし、前述のように遺構を覆う土層の堆積は薄く、樹木の根による搅乱も著しく、当該期のピットとの鑑別は困難を極めた。また、しまりのない1層～2層にかけて掘り込まれているため、床面の認定もやや恣意的にならざるをえず、土層も確認できた範囲の記載とせざるをえなかった。よってここでは、確認状況を記載することにより、他者による検証が可能なよう配慮した。

なお、遺構番号については、調査時点のものをそのまま使用している。また、各遺構の出土遺物については「第5章 調査区内における遺物分布状況」の方を参照されたい。

#### S B-1

位 置 A-1 標高 98.00～98.70m 規模 (460×460) プラン 円形

検出状況 表土掘削中より多量の黒耀石等が集中して検出され、炉と北側壁の掘り込みを確認したことにより、住居と認定した。

重複関係 1回

覆 土 黄色スコリアを微量に含む暗褐色土（1層）、ロームブロックの顕著な暗褐色土（2層）に分層した。

壁・床 壁はやや開き気味にたちあがるようであるが、北側の一部に25cm程残存しているのを確認できただけであり、その検出も困難であった。床面は特に硬質な部分は認められず、住居の掘り方底面は地形に沿い、南西方向にわずかに下がる。

柱 穴 5本が壁に沿って検出されており、主柱穴と考えられる。法量は径30cm、深さ40cm程を測る。

炉 住居跡の中央やや西よりで検出した。平面形状と土層から少なくとも新旧2期の炉が存在したことが想定される。新期の炉は掘り込みの平面形状が不整梢円形を呈し、角礫を方形に囲した石囲炉で、炉石3個と痕跡2ヶ所（1層）が確認された。焼土粒子は中心部（5層）より少量検出した。

#### S B-2

位 置 C-1 標高 97.40～97.80m 規模 (480×470) プラン 円形

検出状況 調査区東南端に位置し、斜面地であったが、表土掘削中より多量の黒耀石等が集中して検出され、炉と北側壁の掘り込みを確認したことにより、住居と認定した。

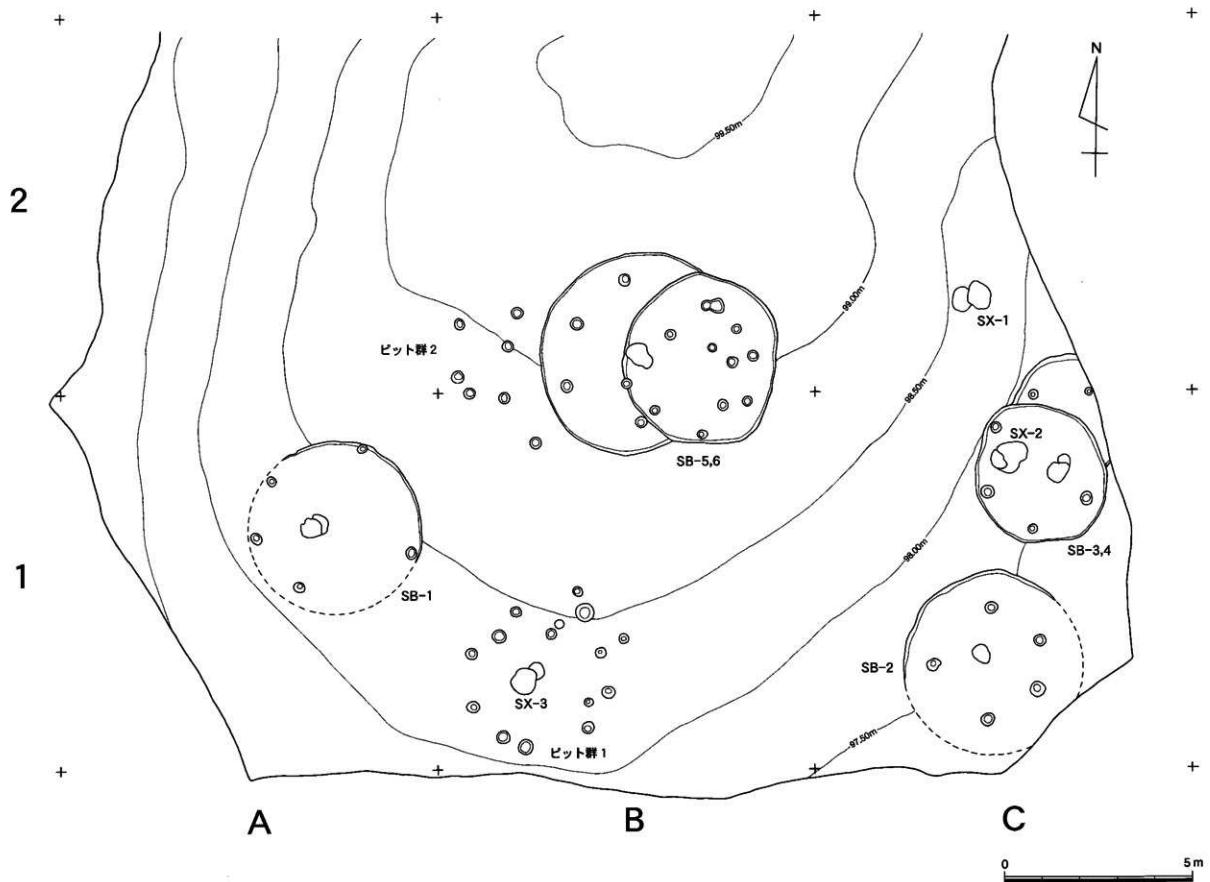
重複関係 1回

覆 土 褐色土をロームブロック、スコリアの含有により分層した。

壁・床 壁はやや開き気味にたちあがるようであるが、北側の一部に15～20cm程残存しているのを確認できただけであり、その検出も困難であった。床は炉の検出位置から2層上面を床面と考えられるが、部分的に確認できたにすぎず、特に硬質な部分は認められなかった。掘り方底面は地形に沿い、東南方向にわずかに下がる。

柱 穴 5本が壁に沿って検出されており、主柱穴と考えられる。法量は径30～40cm、深さ20～40cm程を測る。

炉 住居跡の中央やや北西よりで検出した。掘り込みの平面形状が不整梢円形を呈し、角礫を方形に囲した石囲炉で、炉石3個が確認された。焼土がブロック状に中心部（2層）より検出し



第6図 遺構全体図

**SB-3**

位 置 C-1 標高 97.50~98.00m 規模 380×340 プラン 不整辺円形

検出状況 調査区東南に位置し、斜面地であったが、表土掘削中より多量の黒耀石等が集中して検出した。SX-1調査の際、SB-3の西側壁の掘り込みを確認し、プラン確認作業中にSB-4を検出した。

重複関係 SB-4→SB-3

覆 土 褐色土をスコリアの粒子径、ロームブロック、小礫の含有により分層した。

壁・床 壁は垂直からやや開き気味にたちあがるようであり、5~50cmと斜面下方程残存が悪く、その検出も困難であり、床面として特に硬質な部分は認められなかった。掘り方底面はやや掘りすぎたが、想定される掘り方も地形に沿い、東方向に下がるようである。

柱 穴 4本が壁に沿って検出されており、主柱穴と考えられる。法量は径30~35cm、深さ20~40cm程を測る。

炉 住居跡の中央やや東よりで検出した。掘り込みの平面形状が不整形を呈し、数度の改築を行った可能性がある添石炉で添石は石皿(27-9)を転用している。炉石に焼痕は認められないが、東南の柱穴付近に焼痕のある礫を検出した。炉覆土からは焼土粒子が検出している。

**SB-4**

位 置 C-1~C-2 標高 97.60~98.00m 規模 不明 プラン 不明

検出状況・重複関係 SB-3を参照

覆 土 褐色土をロームブロック、スコリアを含む3層とスコリアをほとんど含まない4層に分層した。

壁・床 遺構自体が北西の一部しか確認できず、壁はやや開き気味にたちあがるようであり、壁高40cm程が確認できる。掘り方底面はやや掘り過ぎてしまったが、地形に沿い、東方向にやや下がる推定する。

柱 穴 2本が壁に沿って検出されており、主柱穴と考えられる。法量は径20~25cm、深さ20cm程を測る。

**SB-5**

位 置 B-1~B-2 標高 98.90~99.10m 規模 450×410 プラン 不整円形

検出状況 本調査当初に設定した試掘トレンチ調査の際、表土掘削中より多量の遺物が集中して検出されたため、遺構の存在を想定したが、プランの確認が困難で壁面の立ち上がりでかろうじてSB-5・6の2基の住居プランを確認した。

重複関係 SB-6→SB-5

覆 土 SB-5の覆土はスコリア、暗褐色のロームブロックを含む褐色土で、SB-6とは色調としまり、粘性により分層した。

壁・床 壁は垂直からやや開き気味にたちあがるようであるが、壁高が15cm程しか確認できず、不明である。床面として特に硬質な部分は認められなかった。掘り方底面はほぼ水平に平坦に掘り込まれている。

柱 穴 SB-5内で13本検出され、数回の改変があったと思われる。また、柱穴の一部はSB-6に伴うものもある。法量は径25~40cm、深さ30~60cmを測る。

**SB-6**

位 置 B-1～B-2 標高 98.90～99.20m 規模 (550×450) プラン 楕円形?

検出状況・重複関係 SB-5を参照

覆 土 SB-6の覆土はスコリア、暗褐色のロームブロックを含む暗褐色土で、SB-5とは色調としまり、粘性により分層した。

壁・床 壁は垂直からやや開き気味にたちあがるようであるが、壁高が5～15cm程しか確認できず、不明である。床面として特に硬質な部分は認められなかった。掘り方底面はほぼ水平に平坦に掘り込まれている。

柱 穴 SB-6内で5本検出された。法量は径25～35cm、深さ60～70cmを測る。

炉 住居跡の中央部で検出した。上部がSB-5により破壊されているため形状は不明であるが、焼土が確認できる。

**炉・ピット群**

住居以外の遺構として炉3基、ピット群を検出している。炉は前述の住居に伴うものは、この項では除外する。プラン・規模はあくまで確認面での記載であり、構築当時の実像と大きくかけ離れる可能性をもつ。炉については屋外炉ではなく、住居に伴うものの他の構造物が確認できなかったものと考えられる。

**炉SX-1**

位 置 C-1 標高 97.50～97.80m (SX-1-1) 97.45～97.65m (SX-1-2)

規 模 50×44 (SX-1-1) 80×80 (SX-1-2) プラン 不整形 (SX-1-1・SX-1-2)

検出状況 調査区東南に位置し、SB-3の覆土内にあたる。表土直下より焼土粒子がみられ、掘り込みを確認したため炉と認定した。切り合ひ関係によりSX-1-1とSX-2-2に分けたが平面形状や掘り方をみるとさらに多くの改築が行われているとおもわれる。

重複関係 SX-1-1→SX-1-2

**炉SX-2**

位 置 C-2 標高 98.55～98.65m (SX-2-1) 98.41～98.46m (SX-2-2)

規 模 65×40 (SX-2-1) 73×61 (SX-2-2) プラン 不整円形 (SX-2-1)

不整橢円形 (SX-2-2)

検出状況 C-2グリッド周辺の表土掘削中から表土より焼土粒子を含む覆土を検出し、掘り方と焼土を検出したため炉と認定した。

重複関係 SX-2-1→SX-2-2

**炉SX-3**

位 置 B-1 標高 98.55～98.55m (SX-3-1) 98.34～98.50m (SX-3-2)

規 模 72×68 (SX-3-1) 46×43 (SX-3-2) プラン 不整円形 (SX-3-1) 円形 (SX-3-2)

検出状況 B-1グリッド周辺の表土掘削中から焼土粒子が含まれ、表土直下に当遺跡では最も大きく焼きしまった焼土が検出され、掘り込みも確認されたため炉として認識した。後述のピット群を伴う住居跡である可能性が高い。

重複関係 SX-3-2→SX-3-1

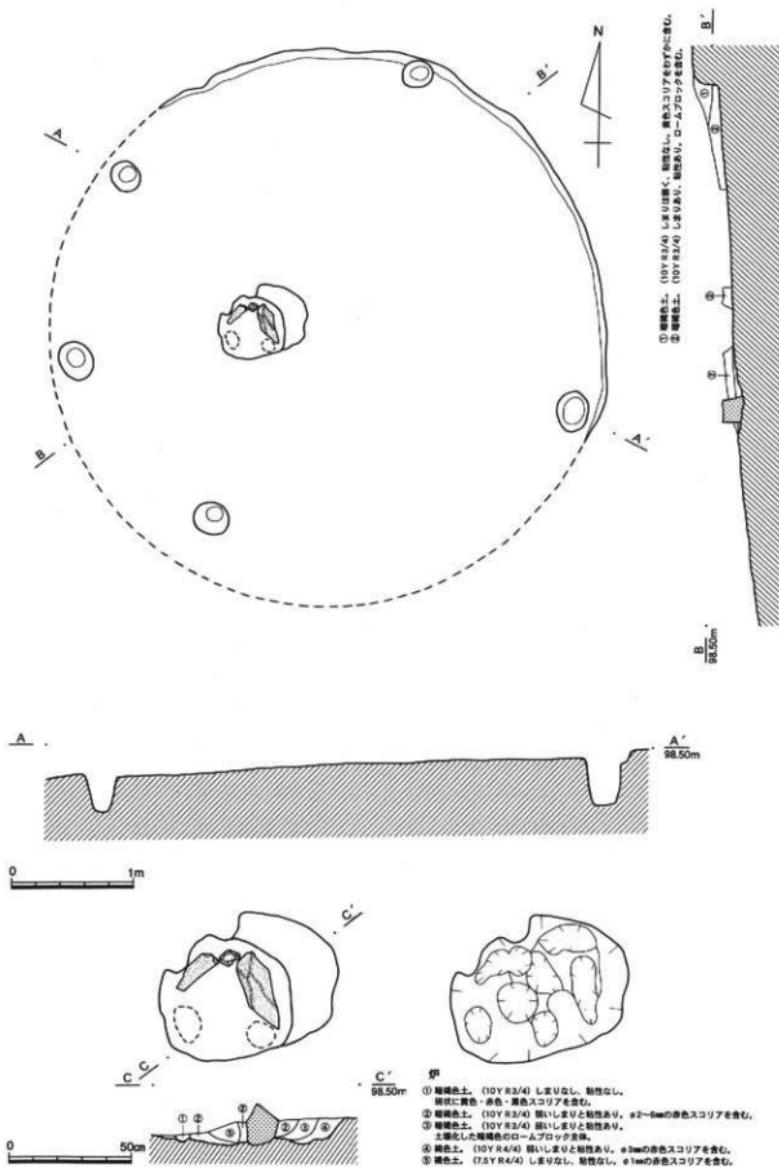
ピット群については住居の柱穴の残存と考えられる。このほかにも調査区中よりいくつかの単独ピットが検出している。しかし、その多くが樹根によるものとの区別がつかないため、掲載しなかった。また、掲載したピットも規模が不揃いで深さがちがうものもあり、一部は樹根の可能性ももつ。

#### ピット群1

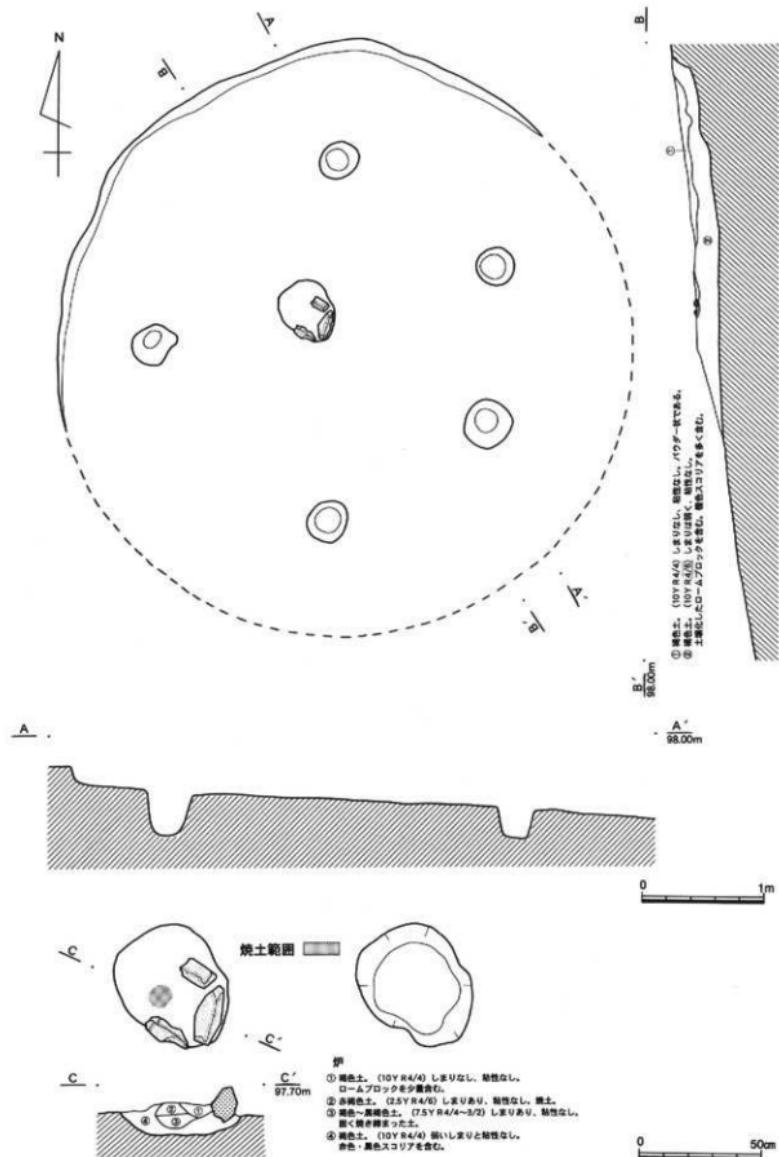
B-1の南西側に位置し、SX-3を中心にして径3.5m程の環状に配置されているようにみえる。各ピットの径は約20~50cm、深さも約20~35cmとばらつきがあるが、径30cm、深さ30cm程にまとまる傾向にある。柱穴とするにはやや浅いが、検出することのできなかつた住居の柱穴の残存とともにとらえることができよう。

#### ピット群2

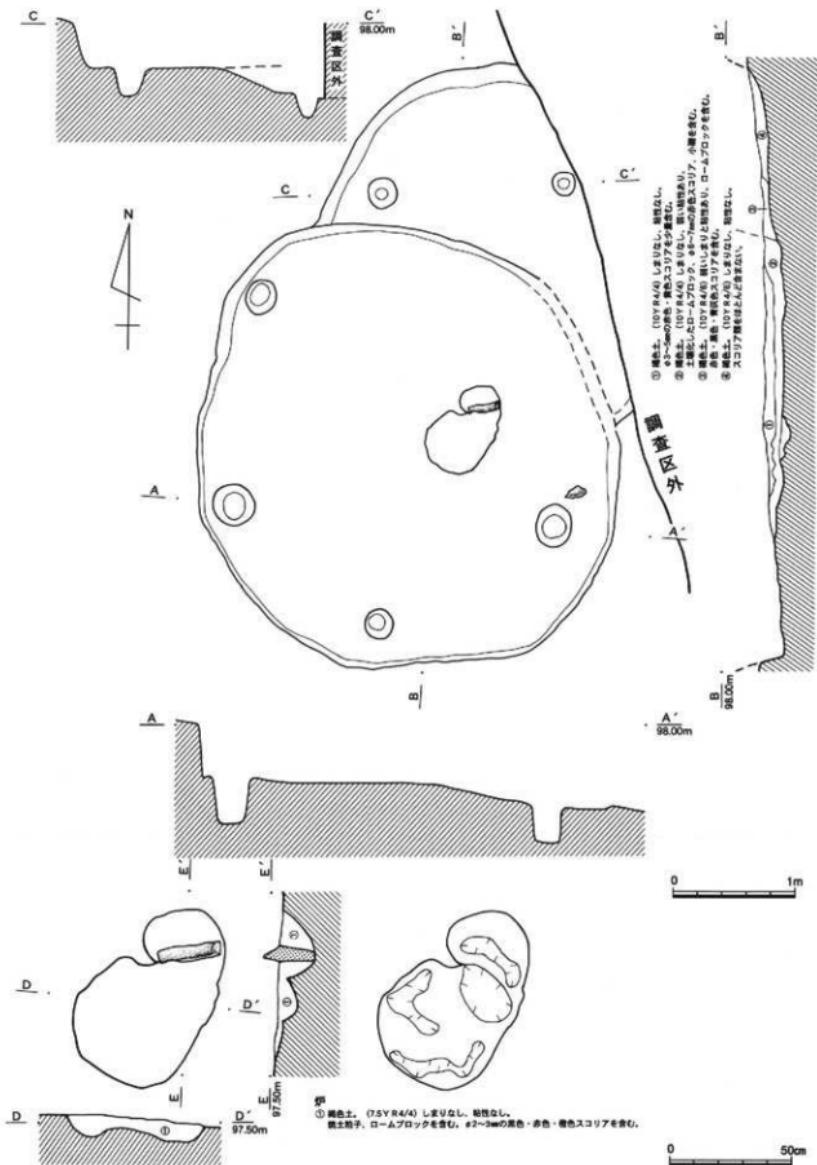
B-1からB-2に位置し、ピット群1のように定形的な配置にはならないが、確認面上層において黒いシミ状の堆積が確認されている。各ピットの径は約30~40cmとまとまるが、深さは約20~60cmとばらつきがある。



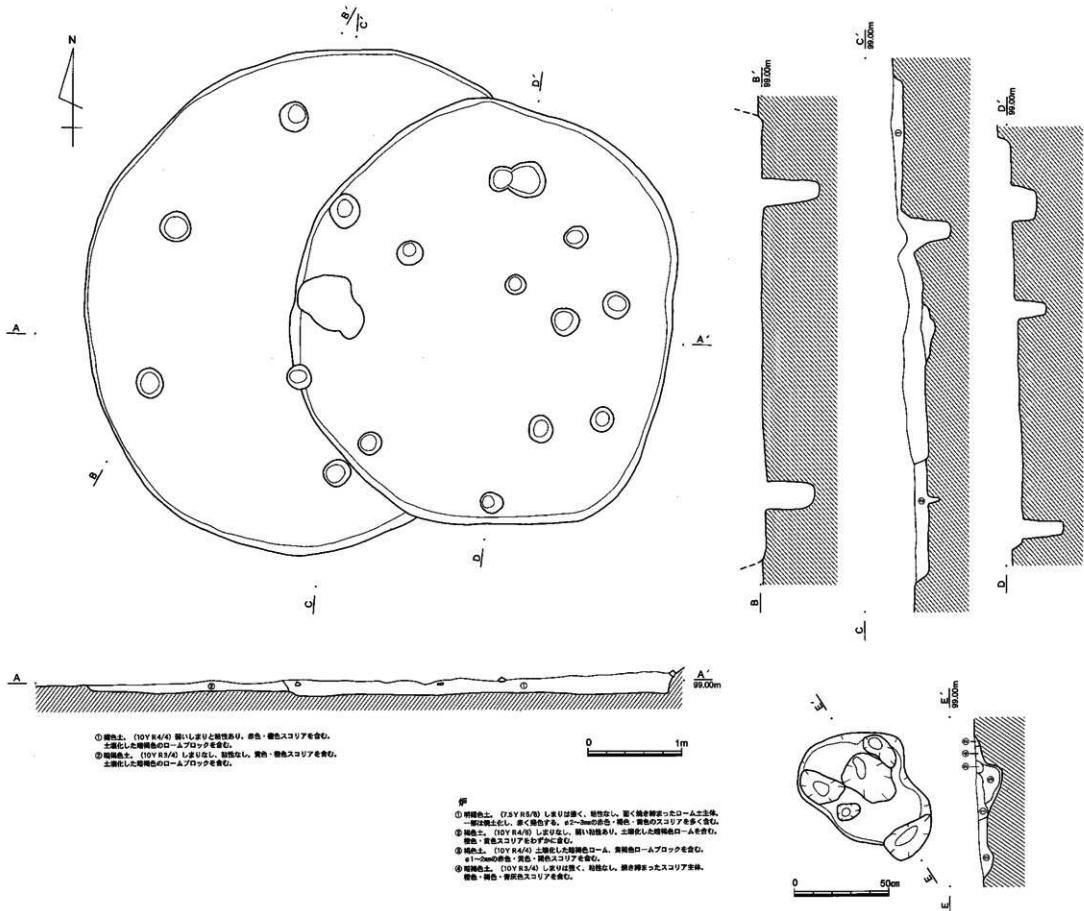
第7図 SB-1



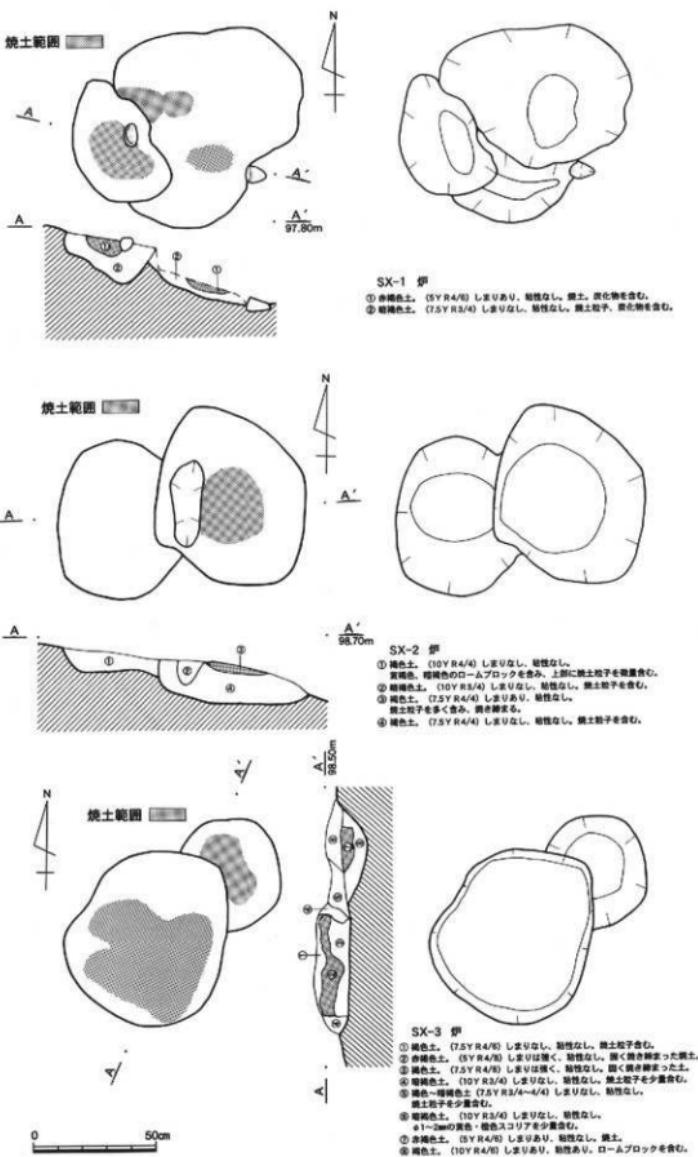
第8図 SB-2



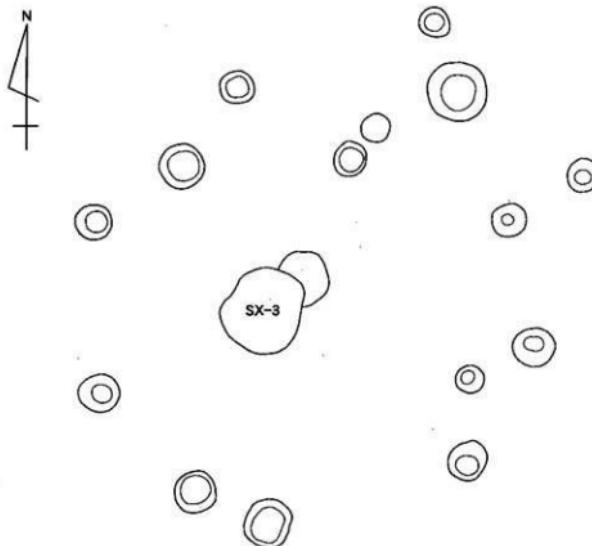
第9圖 SB-3·4



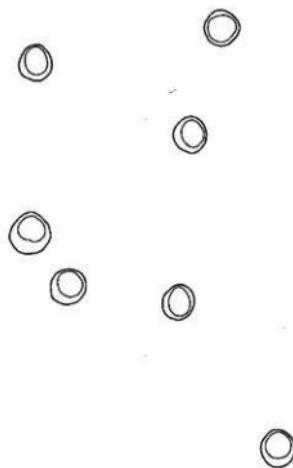
第10図 SB-5・6



第11図 炉：SX-1・SX-2・SX-3



ピット群1



ピット群2

0 1m

第12図 ピット群1・2

## 第2節 繩文時代の土器・土製品

今回の調査で出土した土器は総数約1600点であり、2点の土師質土器の小破片（未掲載）以外はすべて縄文土器である。そのほとんどが縄文時代の中期中葉に比定され、少數の早期・前期の土器を含んでいた。

### 早期・前期（第13図）

早期後葉の条痕文系の土器が26点出土している。小破片ばかりであり、本報告書には比較的大きな破片6点を掲載した。内外面に貝殻の腹縁による条痕や擦痕が施され、繊維の混入が確認できる。

前期の土器として木島式に比定できる破片を2点検出した。いわゆる「おせんべい土器」といわれる薄手の土器片で外面に条痕が施される。

### 中期中葉（第14～20図）

（浦志・池谷 1998）の「静岡県の勝坂式」第III・IV段階、井戸尻編年の藤内式に相当するものが多数を占め、一部II段階（新道）、V・VI段階（井戸尻）といった前後の段階とそれに並行するいわゆる東海系の土器が出土している。本報告書ではまず、接合資料や大破片で器形・文様が明確なものを優先して掲載し（第15・16図）、次に破片資料は大きさよりも本遺跡出土の口縁の形状、文様のヴァリエーションを網羅することを重視して代表資料を掲載した（第17～20図）。

本文では観察表の記載内容の補足説明を中心に記載し、個別の詳細は観察表を参照されたい。

「形態・文様・技法」は器形>文様帯>主文様>区画文>文様要素>充填文という順に不明部分を省きながら「全体から細部へ」となるように記載した。また、主文様・区画文・文様要素は「施文」とし、区画内を面的におこなうものを「充填」、工具による表現を「施す」と使い分けた。施文技法も各研究者間で概念の相異があるが、ここでは以下のように定義する。（第14図も参照）

**パネル文手法**：半截竹管の内面を用いて断面が半円形の半隆帯と並行沈線を同時にひいて区画を作出し、文様を施文・充填する技法

**キャタピラ文**：半截竹管の外表面を用いており、キャタピラの跡のようにみえる文様

**連続爪形文**：逆に半截竹管の内面で押し引き、半円もしくは三日月状の刺痕を連続してこす文様

**三角押文**：ベン先状の工具を用いて結節沈線を引く文様

**温泉マーク**：竹管による半円形刺突と刺突を組み合わせた文様「凸」

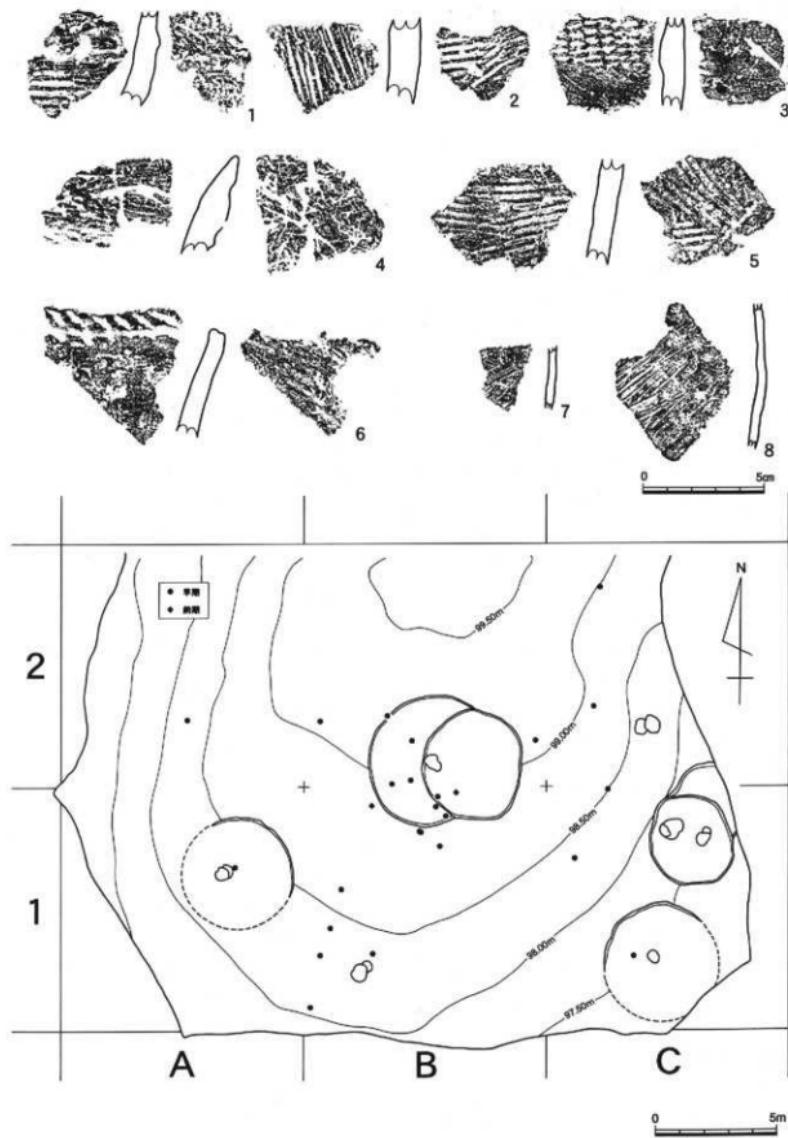
**突起**：基本的に口縁や隆帯を変形して作出し、波状や環状の立体的な文様を突起とする

**把手**：基本的に粘土塊を新たに貼り付けて作出し、突起に比して独立性が強い印象を持つもの

破片資料の段階設定は（黒尾 1995）（仲家 1998）を参考にし、隆帯脇に三角押文を並行させるものを（浦志・池谷 1998）の「II段階」（新道）とし、キャタピラ文やパネル文手法によるものを「III・IV段階」（藤内）、パネル文手法が崩れ、貼り付け隆帯、単純沈線で区画が崩れて動的な様相をもつものを「V・VI段階」（井戸尻）に比定した。

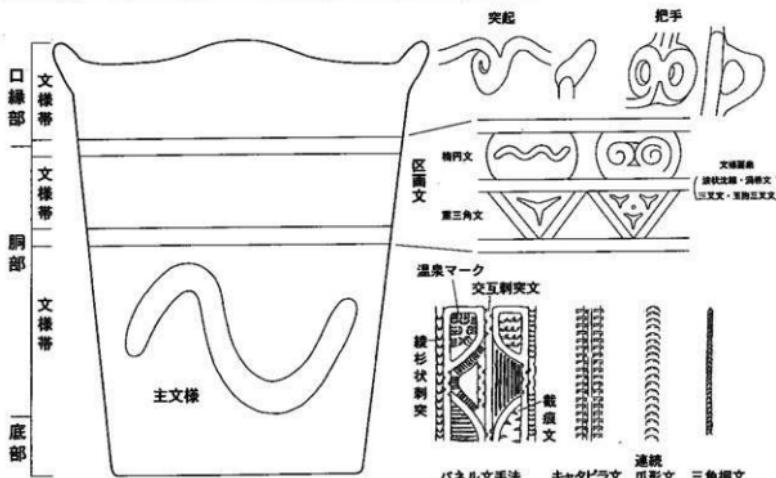
### 土製品（第21図）

調査区全体で、土製円盤6点、土器片錐3点が出土している。比較的遺存度がよいものを2点ずつ掲載した。3のみ口縁部を利用し他は未掲載品も含めて、みな胴部破片を使用している。

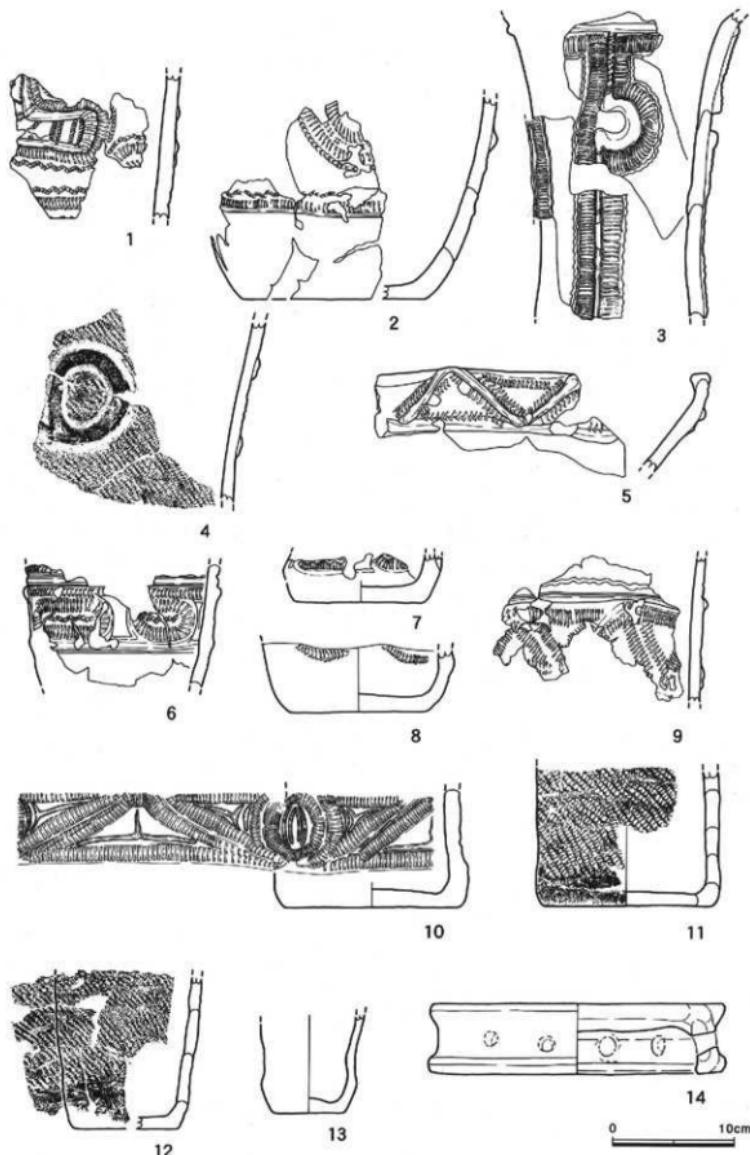


第13図 繩文時代早・前期土器と分布図

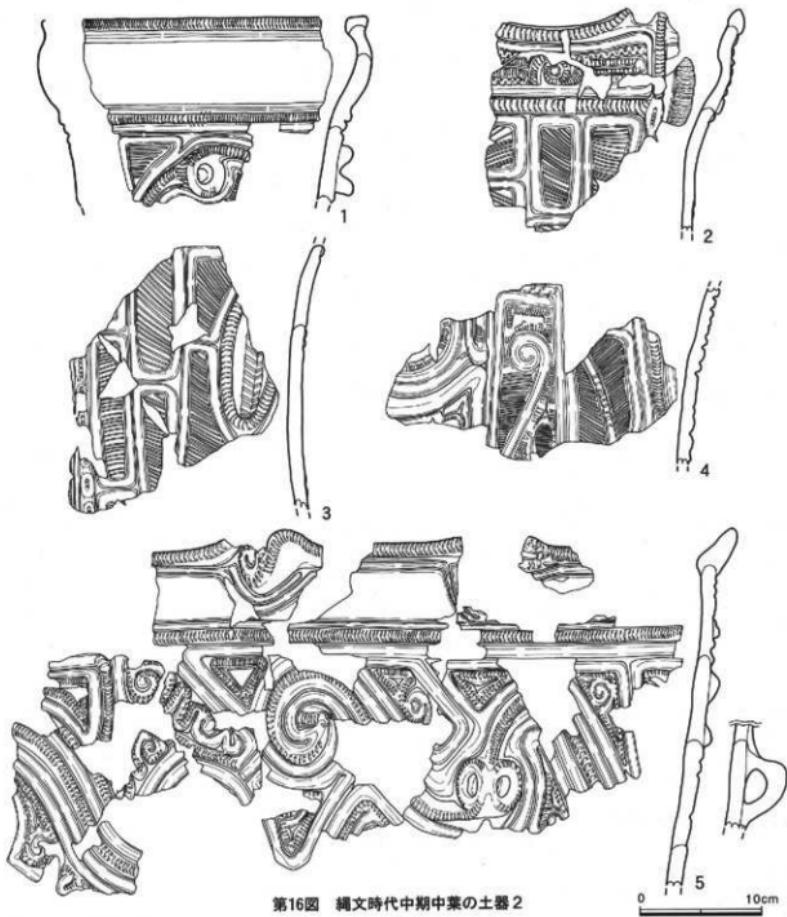
第4表 土器觀察表1



第14圖 離坂式土壤模式圖（金福，1990；黑屋，1995參考）



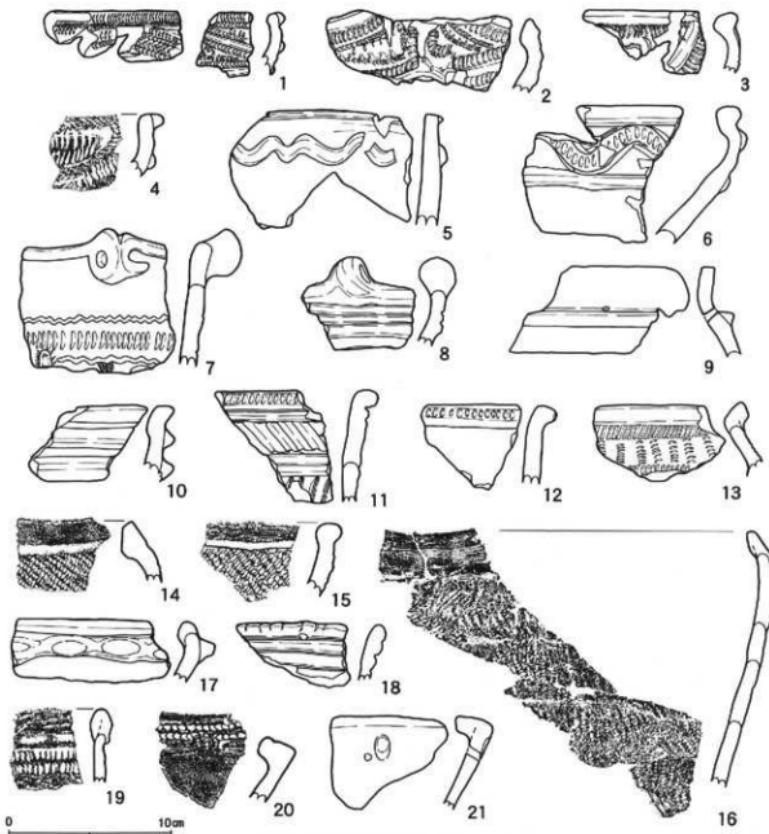
第15図 縄文時代中期中葉の土器1



第16図 縄文時代中期中葉の土器 2

第5表 土器観察表2

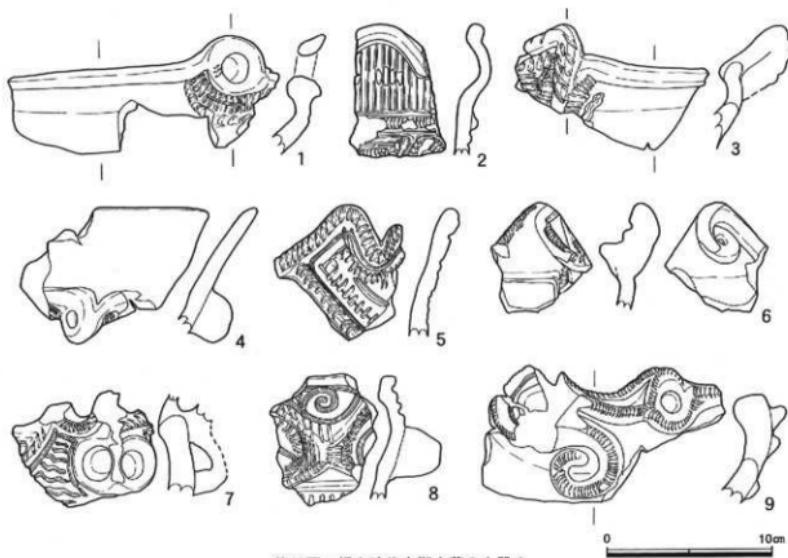
調査場所	グリッド 位置・面積	地層	断面	剖面・文様・模様	色様	出土有物
16-1 im-SB-4	II - M 剥離	断面	口輪部 -側部	口輪部は剥離かトロリバ付を呈し、運搬の割合を示された場合で変形されるが多発。阿波の北支流では不規則が文様の品目に運搬の次第を示し、運送に運搬の跡を示す。パラルヌ文で変形し、集合状態を示す。	外壁: 黒7.3YR4/0 内面: 棕赤褐5YR5/4	滑石、赤灰少、黄石
16-2 im-SB-5	II - M 剥離	断面	口輪部 -側部	口輪部は剥離を呈し、バニカルヌ平出で変形する。周辺内に北支流で文様を呈し、アソ別の文を呈す。周辺内にバニカルヌ平出で変形し、集合状態で出現する。運搬に運搬痕を呈す。一組の凸凹がみられる。表面に薄荷色の斑駁をひき出す。	外壁: にじい黄褐7.5YR4/6 内面: 棕褐2.5YR4/6	滑石多、白色斑片、赤色斑子、砂粒多
16-3 im-SB-5 + 6	II - M 剥離	断面	側部	側部が剥離する状況を呈す。人字文を基準でデータ化すると、バニカルヌ平出で変形し、集合状態で出現する。運存に運搬痕を呈す。一組の三角形文からなり、人字文基準等に運搬の跡を示す。最後に運搬痕の跡跡をひき出す。	外壁: にじい黄褐8.0YR3/6 内面: 棕褐5YR4/6	石灰岩、白色斑片、赤色斑子少、砂粒多
16-4 C-1	II - M 剥離	断面	主に運搬不規則で、バニカルヌ内に、舟底状文様、三文文、三三二文文を呈し、集合状態、運搬痕を呈す。且あるマーク文を呈する。運搬には運搬痕が示す。一組の変形剥離がみられる。表面に薄荷色の斑駁をひき出す。	外壁: にじい黄褐7.5YR4/6 内面: 棕褐3YR4/4	金星石、滑石多、石英岩、長石岩、白色斑片多	
16-5 B-1, 2-A-1 im-SB-5 + 6 底土 - 1層	II - M 剥離	口輪部 - 側部	口輪部は剥離かトロリバ付を呈された場合で変形されるが多発。底土で運搬を示す。運搬痕を呈す。運送を示す。バニカルヌ平出による運送を示す。圓窓は土字の運搬文様を主文とし、アソズヌ文を呈す。運搬痕を示す。運送を示す。三文文、三三文文を呈す。運送を示す。運存に運搬痕を呈す。最後に薄荷色の斑駁をひき出す。	外壁: にじい黄7.5YR6/4 内面: にじい黄7.5YR6/5	滑石多、白色斑片	



第17図 縄文時代中期中葉の土器 3

第6表 土器観察表 3

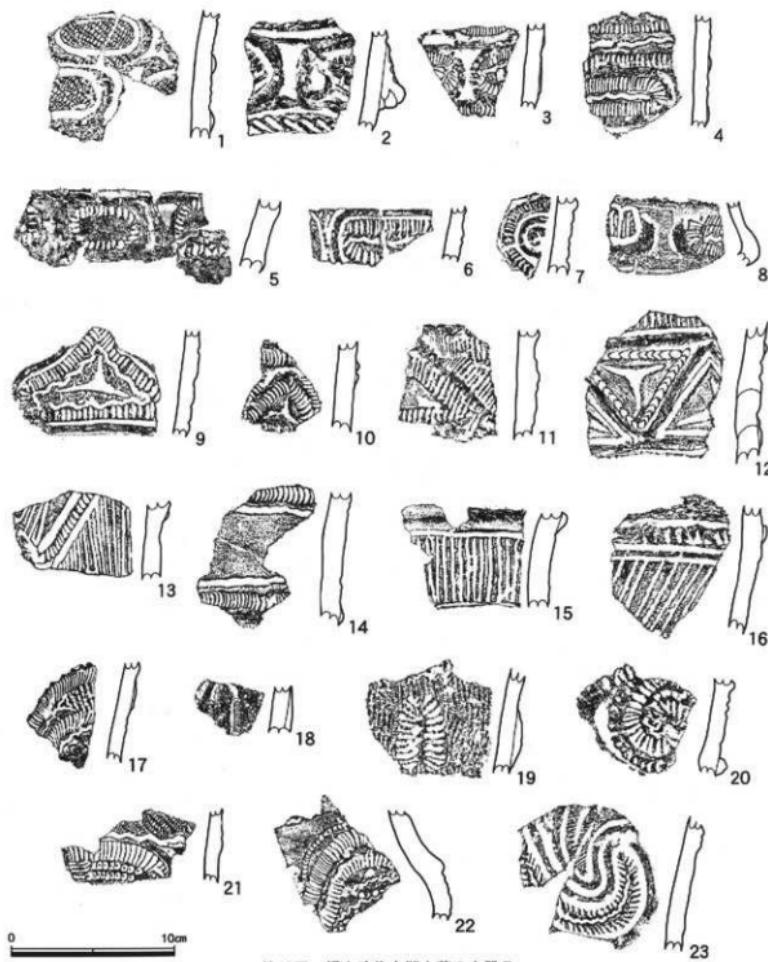
測定番号 遺物番号	グリッド 部位・遺物	測定 部位	基準 部位	形状・文様・技法等	色調	胎土含有物
17-1-C1 17-1-B1	II 口縁部			楕円形に延びる縦條を完結し、縫合に溝状凹部。 櫛状突起部を有し、茎と三角文様で区別される。	外面：明赤YR5/6 内面：赤褐色YR4/6	輝石少、石英
17-2-A1-B1 17-2-B1	II 口縁部			第三三角文様とし、縫合部をキャビティ文であります。三角文様を茎部させ、範底面を充填する。	外面：にぼい褐色7YR5/4 内面：にぼい褐色7YR5/4	金雲母、輝石、石英
17-3-B1 17-3-B1	III 口縁部			第三三角文様とし、縫合部をキャビティ文であります。玉筋三文様を充填する。	外面：にぼい褐色7YR7/4 内面：にぼい褐色10YR4/4	輝石、石英
17-4-A2 17-4-B2	III 口縁部			第三三角文様とし、縫合部を茎部及びしの文様を輪状に施し、茎をオヤヒビ文でおさえる。	外面：にぼい褐色10YR5/3 内面：にぼい褐色7YR5/4	金雲母多、輝石多、石英
17-5-A1-B2 17-5-B1	III 口縁部			横幅に延びる縦條を並び足りる。黄文で、内外面とも丁寧になだれている。	外面：にぼい褐色7YR5/4 内面：にぼい褐色7YR5/4	輝石少、石英少
17-6-B2 17-6-B2	III 口縁部			キャビティ一部の部分を有する。文様部内に横幅に延びる縦條を並び足りる。	外面：にぼい褐色7YR5/4 内面：黒YR6/6	金雲母多、石英
17-7-B1 17-7-B1	II 口縁部			口縁部に斜めの凹部をもつ。仄文文、重複波状文であります。斜め凹部をつくつだし、縫合部に延びる。	外面：にぼい褐色7YR5/4 内面：にぼい褐色7YR5/4	金雲母、輝石、石英、白母石
17-8-B2 17-8-B2	II 口縁部			口縁部に縦幅内に二角文で縫合部の縫合部が輪状ででき、縫合部のしの文様を横幅に充填する。	外面：にぼい褐色7YR5/4 内面：にぼい褐色7YR5/4	金雲母多、石英
17-9-A1 17-9-A1	II 口縁部			口縁部に縦幅内に二角文で縫合部の縫合部が輪状ででき、縫合部のしの文様を横幅に充填する。	外面：にぼい褐色7YR5/4 内面：にぼい褐色7YR5/4	金雲母、輝石、石英
17-10-C1 17-10-C1	II 口縁部 底上			表面三角形の低い縦條を底位に施す。内外面ともよく墨かかれている。	外面：にぼい褐色5/6YR5/4 内面：にぼい褐色5/6YR5/4	輝石多、石英少。白色斑点



第18図 繩文時代中期中葉の土器 4

第7表 土器観察表 4

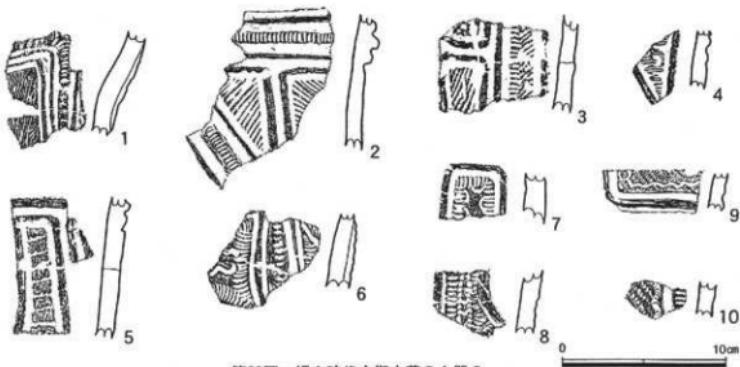
遺物名 測定部位	グリッド 位置	経緯	器種 部位	形態・文様・技法等	色調	胎土含有物
17-1-D-1 mm 1層	II・N 保険 口部	□縄文壺底に灰瓦文を施す。バカラ手法で内面し文様内部を竹管の外側を用いた集合状で充満する。内外面ともよく磨かれている。	外曲: にじいろ系YR54 内面: にじいろ系YR54	薄石、石英、白色粘土		
17-1-D-2 mm 1層	II・N 保険 口部	□縄文壺底に灰瓦文を施す。	外曲: にじいろ系YR740 内面: にじいろ系YR54	薄石、石英、白色粘土		
17-1-D-3 mm 1層	II・N 保険 口部	□口部の施壺をキヤビラ文でおさえ、小形の平底竹管で灰瓦文を充満する。	外曲: にじいろ系YR740 内面: にじいろ系YR740	薄石、石英、白色粘土		
17-1-D-4 mm 1層	II・N 保険 口部	□口部が膨らむ前段、尻谷内面下で張付口なしの縄文を側板に施す。	外曲: にじいろ系YR740 内面: 明るい系YR54	金雲母、薄石、石英		
17-1-D-5 mm 1層	II・N 保険 口部	尻谷部正面に折れ込みの施壺を側板に施す。	外曲: にじいろ系YR40 内面: にじいろ系YR54	薄石、石英、白色粘土		
17-1-D-6 mm 1層	II・N 保険 口部	口部が腰や下に膨らむ復縄壺。尻谷部の接合部を意図的に残す。原付口の縄文を側板に施すが口部付近のみが残されている。	外曲: 明るい系YR54 内面: 明るい系YR54	薄石、石英、白色粘土		
17-1-D-7 mm SB-3# 瓦土・1層	V・VI 保険 口部	縫合状跡を平行する二部構成で、何がどう掛け替わったのかはわからぬ。	外曲: にじいろ系YR54	金雲母、薄石、石英		
17-1-D-8 mm 1層	II・N 保険 口部	半輪状による模倣の併行斜面を施し、口部端に演化した通縄瓦文を施す。	外曲: にじいろ系YR740 内面: にじいろ系YR740	金雲母、石英、白色粘土		
17-1-D-9 mm SB-3# ?	II・N 保険 口部	白くてやや黒い(船上に墜落した可能性)。中筋部に横筋が施さずともか?	外曲: にじいろ系YR740 内面: にじいろ系YR740	金雲母、薄石、石英		
17-20-A-1 瓦土	II・N 保険 口部	絞込みをぶち込むように筋状で形成する。横筋にキヤビラ文を施す。	外曲: にじいろ系YR54 内面: 明るい系YR54	金雲母、薄石、石英		
17-21-C-1 mm 1層	II・N 保険 口部	縫合状の跡を有し、縫合部の隙間も確認できる。	外曲: 明るい系YR54 内面: 明るい系YR54	金雲母、薄石、石英		
18-1-D-1・2 瓦土・1層	II・N 保険 口部	複数の子をもじり縁が膨らむキャリバー状を呈するところ認められる。子を膨らむキヤビラ文でえぐ。三角文を運び作される。	外曲: にじいろ系YR40 内面: にじいろ系YR40	薄石、石英		
18-2-A-2 mm 1層	II・N 保険 口部	口部斜丸内面が複数の子で構成され凹口状を呈し、外側は半円柱竹管による組合の組合状を充填する。	外曲: にじいろ系YR54 内面: にじいろ系YR54	金雲母少、薄石、石英		
18-2-D-1・2,C-3 mm 1層	II・N 保険 口部	下筋部に複数の子で組合竹管文、縫合状跡を施し、バカラ手法で画面され三文の施紋が確認される。斜丸を下ろす。今やつぶたれた組合の組合を右にし、縫合部をキヤビラ文でおさえ。	外曲: にじいろ系YR54 内面: にじいろ系YR54	薄石、石英、白色粘土		
18-2-D-1・2,C-3 mm SB-3# ?	II・N 保険 口部	組合状を運び作されるところ認められる。	外曲: にじいろ系YR40 内面: にじいろ系YR40	金雲母少、薄石、石英		
18-4-A-2 瓦土	II・N 保険 口部	ラッパ状に大きく外反する形状で、直面に組合状をもじりキヤビラ文で施すおさえ。	外曲: にじいろ系YR54 内面: にじいろ系YR54	金雲母少、薄石、石英		
18-5-B-2 瓦土	V・VI 保険 口部	口部は施壺を呈し、バカラ手法で組合し、表面に基となるように灰瓦文を施す。	外曲: 明るい系YR54 内面: にじいろ系YR54	薄石、石英、白色粘土		
18-5-B-3 ?	V・VI 保険 口部	口部内に灰瓦文が確認できる。隨時に組合灰瓦文を施し、最後に縫合部の施縫をひき出す。	外曲: にじいろ系YR54 内面: にじいろ系YR54	金雲母、薄石、石英		
18-5-C-1 瓦土	V・VI 保険 口部	突起をもじり縁部が膨らむキャリバー状を呈する。縫合部は平行斜面で、縫合部に施縫を施す。	外曲: にじいろ系YR54 内面: にじいろ系YR54	金雲母、薄石、石英		
18-5-C-1 ?	V・VI 保険 口部	突起をもじり縁部が膨らむキャリバー状を呈する。縫合部は平行斜面で、縫合部に施縫を施す。	外曲: にじいろ系YR54 内面: にじいろ系YR54	金雲母、薄石、石英		
18-5-C-1 ?	V・VI 保険 口部	縫合部が多々存在不規則。ミミズク手法を施し、縫合部の施縫を施す組合状で施すおさえ。縫合部を運び作成する。	外曲: にじいろ系YR54 内面: にじいろ系YR54	薄石、石英、白色粘土		
18-5-C-1 ?	V・VI 保険 口部	縫合部を運び作成する。	外曲: にじいろ系YR54 内面: にじいろ系YR54	薄石、石英、白色粘土		
18-5-C-1 ?	V・VI 保険 口部	第三三角区の組合部を尖突状に割り出し、複合状を施す。裏面は灰瓦文を施す。	外曲: にじいろ系YR54 内面: にじいろ系YR54	薄石、石英、白色粘土		
18-5-C-1 ?	V・VI 保険 口部	第三三角区の組合部を尖突状に割り出し、複合状を施す。裏面は灰瓦文を施す。	外曲: にじいろ系YR54 内面: にじいろ系YR54	薄石、石英、白色粘土		
18-5-C-1 ?	V・VI 保険 口部	第三三角区の組合部を尖突状に割り出し、複合状を施す。裏面は灰瓦文を施す。	外曲: にじいろ系YR54 内面: にじいろ系YR54	薄石、石英、白色粘土		



第19図 縄文時代中期中葉の土器5

第8表 土器観察表5

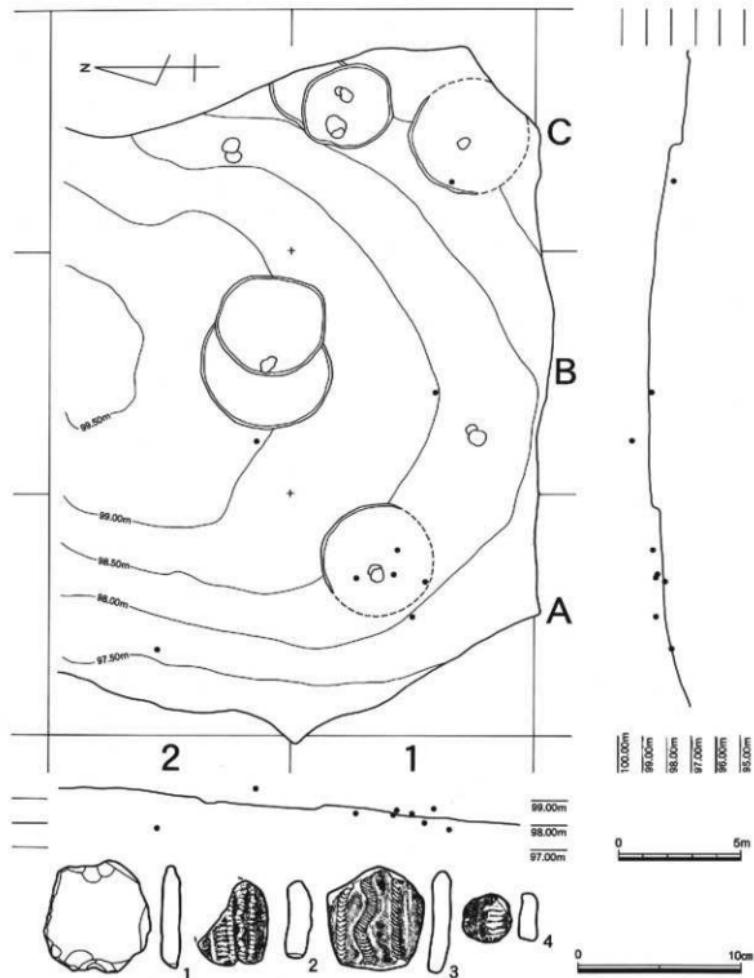
回収番号 遺物番号	グリッド 発見場所・遺物	表面 状態	器種 部位	布量・文様・技法等	色調	出土古文書
19-1-C1 W1000m-1 磐	I	無い	縦い織痕の横円区画内に波状文1の模文を斜方に充填し、斜帶縫を斜めでおさえれる。	表面: 水白地S5.5 内面: 模文模JYR337	金黄赤、薄石、石英	
19-2-A3 W1000m-2 磐	II - N	有り	文織痕の横円区画内を斜めでおさえ、直行文を斜めに充填する。右の横円は突起を有する。	表面: 模文模JYR337 内面: 模文模JYR336	薄石多、石英多、白色斑片	
19-3-C1 W1000m-3 磐	II - N	有り	文織痕の横円区画内をキャラビラ文でおさえ、波状模痕を充填できる。	表面: C-351-小窓YRA44 内面: C-351-小窓YRA44	赤褐色、石英多、薄石、白色斑片	
19-4-B1 W1000m-4 磐	II - N	有り	縦い織痕の横円内をキャラビラ文でおさえ、波状模痕を充填する。	表面: 模文模YRA44 内面: C-351-小窓YRA44	薄石、石英多、白色斑片	
19-5-C1 W1000m-5 磐	II - N	有り	文織痕の内の縦い後縁に上る横円区画内を爪形文でおさえ、内面に文織を充填しない。	表面: 模27.YRB66 内面: 模27.YRB66	薄石多、石英	



第24図 繩文時代中期中葉の土器 6

第9表 土器観察表 6

調査番号	アリーナ番号	出典	器種	器種	形態・文様・技法等	色調	土色含物
19-6 m1 C-1	III - IV				ハカリ文字地による幾何状模内にキャビラ文、三角押文による 施状模様を有する。	外面：褐色7.5YR6R 内面：にじいろ7.5YR5/4	輝石、石英
19-7 m1 C-1	III - IV				ハカリ文字地による幾何状模内にキャビラ文等を施す。	外面：褐色7.5YR6R 内面：にじいろ7.5YR5/4	輝石、石英多、白色漂片
19-8 m1 B-2	III - IV				底面焼け、削り落した縁内側を、右斜状模で施す大斜状模を充填し、 右斜状模でささえ。三角押文による施状模を充填させる。	外面：にじいろ7.5YR6/6 内面：にじいろ7.5YR5/3	金星母少、輝石、石英
19-9 m1 B-1	III - IV				三斜状模をキャビラ文でおさえ。三角押文による 施状模を充填する。三叉文を施す。	外面：褐色7.5YR6/4 内面：にじいろ7.5YR6/4	輝石、石英多
19-10 m1 SB-5	III - IV				裏面内側をキャビラ文でおさえ。三叉文を施す。	外面：褐色7.5YR6/4 内面：にじいろ7.5YR6/4	石英、輝石多
19-11 A-2 m1 土	II - IV				裏面内側をキャビラ文でおさえ。	外面：褐色SYR4/6 内面：にじいろ7.5YR5/4	金星母多、輝石多、石英多
19-12 C-1 m1 SB-3	II - IV				文様帶内にハカリ文字地による直二角内側面で区画し、三角押文、沈線でさえ。 三叉文を施す。文様帶の上端は施す他の集合状模の先端が確認できる。	外面：褐色7.5YR6/6 内面：明る褐色SYR5/6	輝石少、石英
19-13 C-1 m1 1層	II - IV				直二角が施された状の文様と思われる。施帶に爪彫文をし、斜行集合状模を充填し、 施状模を充填できる。	外面：にじいろ7.5YR6/4 内面：にじいろ7.5YR5/4	金星母少、輝石
19-14 B-2,C-2 SB-5,SB-3P	II - IV				横状状模を施す。横状状模を施す文様文をおさえ。後状模様を有する。	外面：褐色SYR5/6 内面：にじいろ7.5YR5/4	石英多
19-15 B-2,C-3 1層-SB-5	II - IV				横状状模の施帶を沈線で充填でおさえ。施帶集合状模を充填する。	外面：褐色7.5YR6/6 内面：明る褐色SYR5/6	輝石少、石英
19-16 C-1 m1 1層	II - IV				文様帶の施帶を施す施帶をハカリ文字地でおさえ。斜行集合状模を充填する。	外面：褐色SYR4/6 内面：にじいろ7.5YR5/4	輝石少、石英、白色漂片
19-17 B-2 m1 SB-5	II				施文文？幅広の施帶に三角押文を充填し、縁にキャビラ文を施す。 施状模を充填させる。	外面：褐色7.5YR6/4 内面：にじいろ7.5YR5/4	輝石少、石英
19-18 A-1 m1 土	II				毛生状模文。施帶を三斜角押文でおさえ。	外面：褐色SYR4/6 内面：にじいろ7.5YR5/4	金星母少、輝石少、石英多
19-19 B-2 m1 土	II - IV				毛生状模文。地に網体文しの文様を模状に施し。施帶をキャビラ文でおさえ。	外面：褐色SYR5/6 内面：褐色7.5YR4/5	輝石、石英
19-20 C-1 m1 土	II - IV				施帶をキャビラ文でおさえ。二斜角押文による施状模を有する。	外面：にじいろ7.5YR5/6 内面：にじいろ7.5YR5/4	輝石少、石英、白色漂片
19-21 B-1 m1 1層	II - IV				施帶をキャビラ文でおさえ。竹彫文による施帶を充填する。	外面：褐色7.5YR5/3 内面：にじいろ7.5YR4/4	輝石少、石英、白色漂片
19-22 A-1 m1 土	II - IV				施帶をキャビラ文でおさえ。三斜角押文を平行させ、施状模を充填する。	外面：にじいろ7.5YR5/6 内面：褐色SYR5/6	金星母少、輝石、石英
19-23 C-1 m1 1層	II - IV				横状の施帶上に状状模、頭部を施し、ハカリ文字地により斜向。 集合状模を充填する。	外面：にじいろ7.5YR5/6 内面：にじいろ7.5YR5/4	金星母多、石英、輝石少
20-1 m1 1層-SB-5	III - IV				ハカリ文字地で区画し、施帶を施す。	外面：褐色SYR4/6 内面：褐色SYR4/6	輝石多、石英、白色漂片
20-2 m1 土	III - IV				ハカリ文字地で区画し、斜行集合状模を充填する。施帶上に爪彫文を施す。	外面：褐色7.5YR6/6 内面：褐色7.5YR5/1	金星母少、輝石、石英
20-3 C-1 m1 土	III - IV				ハカリ文字地で区画し、斜行集合状模を充填する。施帶上に網状状模日を施す。	外面：褐色7.5YR6/6 内面：褐色7.5YR6/6	金星母少、輝石、石英、白色漂片
20-4 B-1 m1 1層	III - IV				ハカリ文字地で区画し、斜行集合状模を充填し、趾文を施す。	外面：褐色7.5YR6/4 内面：褐色7.5YR6/4	輝石多、石英、白色漂片
20-5 A-2 m1 1層	III - IV				ハカリ文字地で区画し、半斜状模の施帶を施ねた状状模を充填する。	外面：褐色7.5YR6/6 内面：褐色7.5YR5/2	金星母少、輝石、石英多、白色漂片
20-6 A-1 m1 1層	III - IV				ハカリ文字地で区画し、キャビラ文でおさえ。施状模を施す。	外面：褐色7.5YR6/6 内面：にじいろ7.5YR5/4	輝石、石英、白色漂片
20-7 A-2 m1 1層	III - IV				施帶に爪彫文を施す。	外面：にじいろ7.5YR5/4 内面：にじいろ7.5YR5/4	金星母少
20-8 C-1 m1 土	III - IV				ハカリ文字地で区画し、施帶マーク又は施す。	外面：褐色7.5YR6/6 内面：褐色7.5YR6/6	輝石、石英、白色漂片
20-9 C-1 m1 土	III - IV				ハカリ文字地で区画し、連続風呂形、三角押文を充填する。	外面：褐色7.5YR5/3 内面：にじいろ7.5YR5/4	輝石、石英、白色漂片
20-10 C-1 m1 土	III - IV				ハカリ文字地で区画し、施帶2の文様を被覆し充填し、施状模を施す。	外面：赤褐色SYR4/6 内面：赤褐色SYR4/6	輝石少、石英多、白色漂片
20-11 C-1 m1 土	III - IV				ハカリ文字地で区画し、三角押文を平行させ、網体文しの文様を模状に充填する。 施帶上に網状状模を施す。	外面：褐色7.5YR6/6 内面：褐色7.5YR6/6	石英、白色漂片



第21図 土製品分布図・実測図

第10表 土製品観察表

回収番号 遺物番号	グリッド 部位	分類	長軸	短軸	厚さ	重量	利用部位	擦れ	文様	色調	胎土
21-1 B-1 120 1層	土器片鉢	68mm	66mm	11mm	59.1g	底部	○		模STYR6/6	黒石、石英、長石	
21-2 A-1 671 1層	土器片鉢	51mm	[43] mm	14mm	26.7g	側面部	○	キャタピラ文・三角押文	模7.SYR6/6	金雲母、黒石、石英	
21-3 A-1 511	土器円盤	63mm	59mm	11mm	59.7g	口縁部	○	輪帯に楕円に並行する連続 点形文、三角押文	模7.SYR4/6	金雲母、黒石、石英、 長石	
21-4 B-2 322 1層	土器円盤	29mm	29mm	10mm	10.7g	側面部	○	キャタピラ文	にぶい黄褐色YR5/4	黒石、石英	

### 第3節 石 器

今回の調査で出土した石器・礫・剥片類は総数1056点である。尖頭器や剥片の一部には旧石器時代の所産と思われるものもわずかに存在するが、ほとんどは、土器の出土状況等からみて繩文時代中期中葉の所産と考えられる。分類は（鈴木 1991）を参考にし、用途・機能という観点を主とし、器種ごとに形態による細分をおこない、代表資料を掲載している。

#### 1 特異具

##### 尖頭器（第22図1）

黒耀石製が1点出土している。断面が三角形状で素材剥片の剥離面を広く残し、幅広で粗雑な平坦剥離をして縁辺部を細かな剥離で調整する。表面の風化が著しく、旧石器時代の所産の可能性が高い。

##### 石 砥（第22図2～15）

黒耀石製が14点出土している。2は木葉の形状から尖頭器にも分類できるが、小形であり、機能という観点から鎌（1類）に分類した。素材の剥離面が残らない程調整が及んでおり、形状や剥離の仕方から、他類と時期を異にする可能性がある。3以降は典型的な石鎌で、すべて無茎である。抉入の浅い3～10（2類）と深い11～15（3類）に分類して提示した。2類は形状により三角形3～6と長三角形7～10に細分でき、また3～5は素材の剥離面を広く残す（10未製品）。3類は全体に形状が類似し、素材の剥離面をほとんど残さない。

#### 2 工具・農具

##### 楔形石器（第22図16・17）

小形で両端に剥離痕が認められるものを楔形石器として分類した。黒耀石製が総数11点出土している。

##### スクレイバー類（第23図・第24図1～6）

素材剥片の形状を生かし、周縁部を調整して形状を整える石器で、切る、削る、搔く等の機能が想定されるものをスクレイバー類として分類した。そのうち、つまみ部を作出したものを石匕（第23図1～4・第24図1・2）とし、素材剥片の周縁に微細な剥離により刃部を作出したものをスクレイバーとした。

石匕は総数8点で、横型の形態が6点、縦型が2点出土している。横型は流紋岩・ホルンフェルスを石材とし、素材剥片の形状を生かし、粗雑な剥離によりつまみ部と刃部を作する。縦型は黒耀石を石材とし、素材剥片の形状を生かし、側縁を両面からの細かな剥離で作出す。

スクレイバーは総数4点出土しており、素材剥片の側縁に細かな剥離をおこなうもの（第24図3）、側縁の一部に細かな剥離をおこなうもの（第24図4）や不定形で肉厚なもの（第24図6）もある。また、（第24図5）は横刃型石器ともいえ、大きさや形態、剥離手法からみれば石匕の項に列するべきかもしれない。（石核は後述）

##### 打製石斧（第25図・第26図1～3）

総数47点出土した。形状は（第26図1）の撥形以外、短冊形を呈する。基部や全体の形状により分類可能であるが、原礫面、素材剥離面を残し、周縁を大きな剥離で作出すことにより形を整える手法は共通している（第26図2・5は例外的）。掲載した石斧は当遺跡出土品内の一応のヴァリエーションを示した。一部の緑色凝灰岩製の片刃のもの（第26図3）は、厚手で側面からみるとやや湾曲しており「鎌」という印象が強い。

##### 磨製石斧（第26図4・5）

磨製石斧は総数4点出土した。刃部に破損や剥離が、基部に敲打痕が確認できる。断面形状は梢円形を呈し、刃部は破損品を含め、蛤刃と呼ばれる両刃であったと思われる。いわゆる定格式のものは確認できなかった。

**3 漁撈具****石 錘 (第26図6)**

1点のみ出土している。梢円形の礫を用い端部4ヶ所を敲打し、縄掛け部を作り出す。漁撈具としたが、重さや遺跡の立地等からみて編み物を編む際のおもりという用途も想定できる。

**4 調理具****敲石・磨石 (第27図1~8)**

敲打痕、磨痕が観察できる円礫素材のものを敲石・磨石と一括する。球形の磨石や小破片以外は打痕、磨痕とも確認でき、ほとんどのが「磨る」「敲く」の用途を兼ねていたと思われる。しかし、利用した礫の形状により、使用痕の位置や使用頻度の違いを見ることが可能となることから、形状と使用頻度より便宜的に「敲石」・「磨石」・「敲・磨石」に分類した。

棒状の礫(1~3)を「敲石」とした。総数7点出土しており、棒状礫は(3)の撥形以外は、長梢円の形状を呈する。敲打痕はおもに両端部もしくは一方の端部にみられ、剥離痕を残す強い打痕と弱い連続的な打痕が共存するものが多い。磨面は側縁に部分的にみられ、(3)や小形のもの以外ははっきりしないものが多い。

梢円形や不定形の礫を用い打痕、磨面が確認できるものを「敲・磨石」とした(4~7)。総数50点が出土している。梢円礫は扁平なもの(6)とに細別できる。扁平礫は平坦面に磨面をもち(一部凹部あり)、側縁は弱い打撃の連続的な打痕をもつよう位による使い分けが明確で、痕跡もはっきりしているのに対して、そうでないものは、使用部位の分化が明確でなく、痕跡も弱い。このことは用途や道具としての性格の違いを表していると推定できる。不定形の礫は総数3点確認でき、比較的小形で打痕、磨面ともはっきりしている。

小形で球形に近い磨面が頗著なものを「磨石」とした(8)。総数6点出土している。磨面の顕著な部分と弱い部分が存在し、歪なものが多い。

**石 盆 (第27図9~11)**

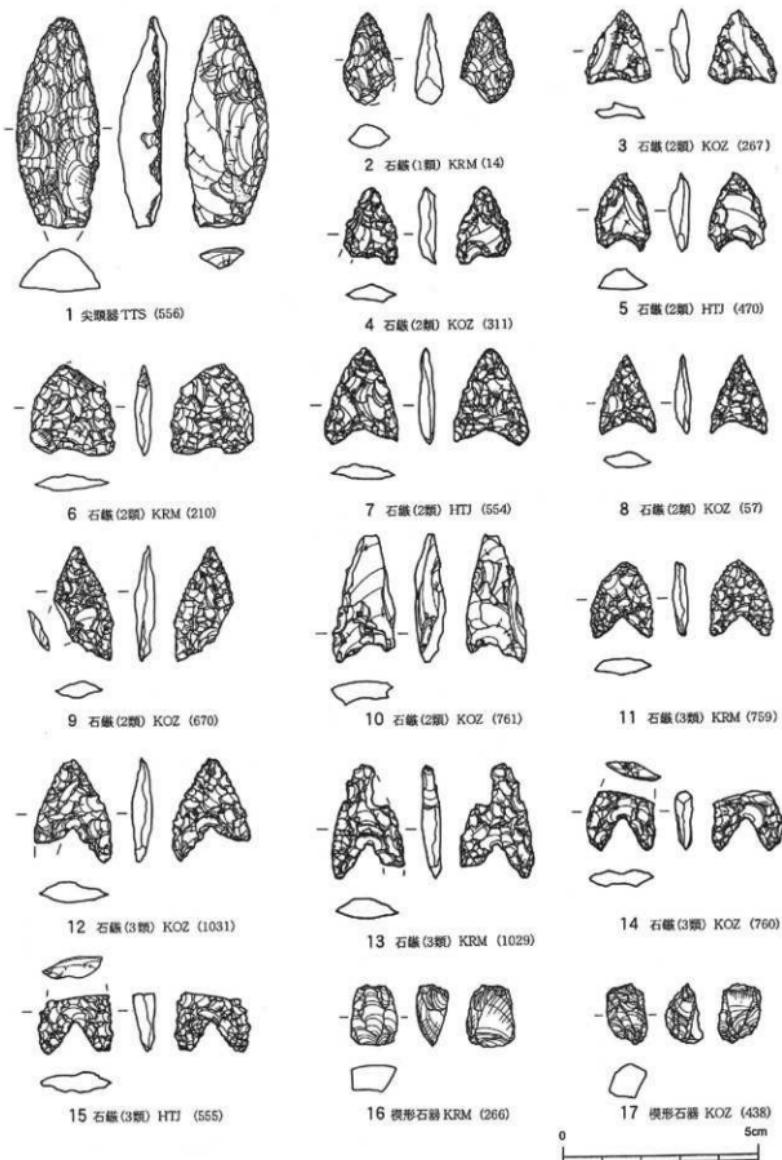
縁面が使用により溝状に凹んだもの(9~10)2点と不定形で大型礫の扁平部に使用痕がみられる、いわゆる台石(11)4点が出土した。(9)はSB-3の炉石に転用されている。総じて磨面が顕著で打痕の明確なものはみられない。(11)は多孔質の溶岩を用いているが他は安山岩質の石材を用いている。

**5 祭祀具****石 棒 (第27図12)**

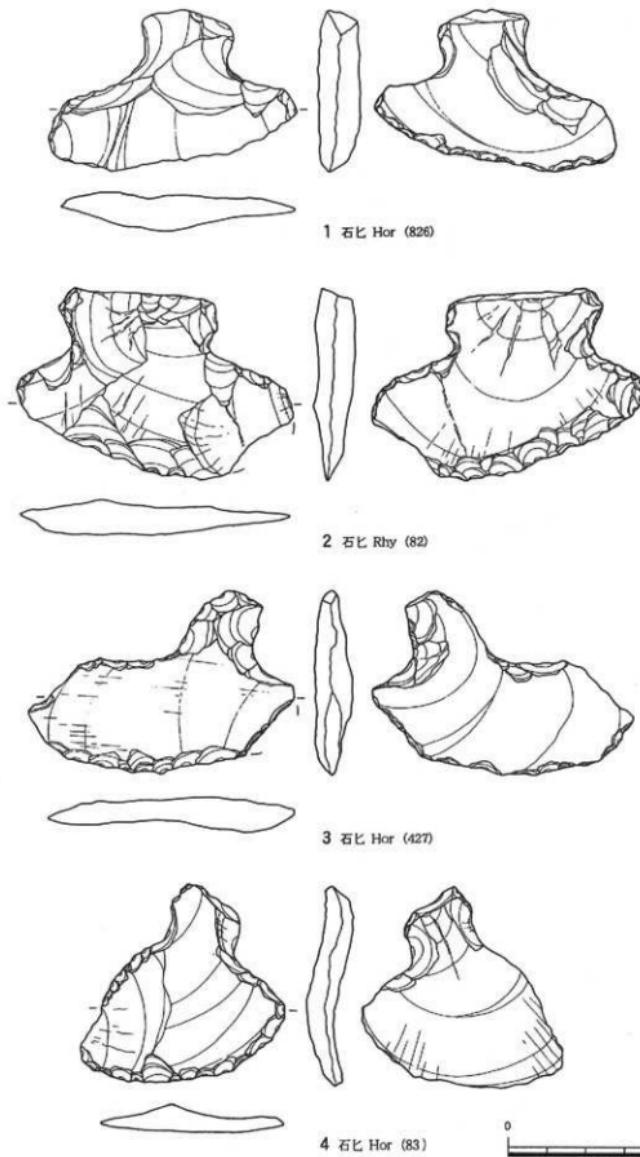
石棒が1点出土している。粗雑な調整により頭部の形を、敲打により首部のくびれを作り出す。製作途中の未製品である可能性も考えられる。デイサイト製で表面の風化が著しい。

**6 石 材****石 核 (第24図7)**

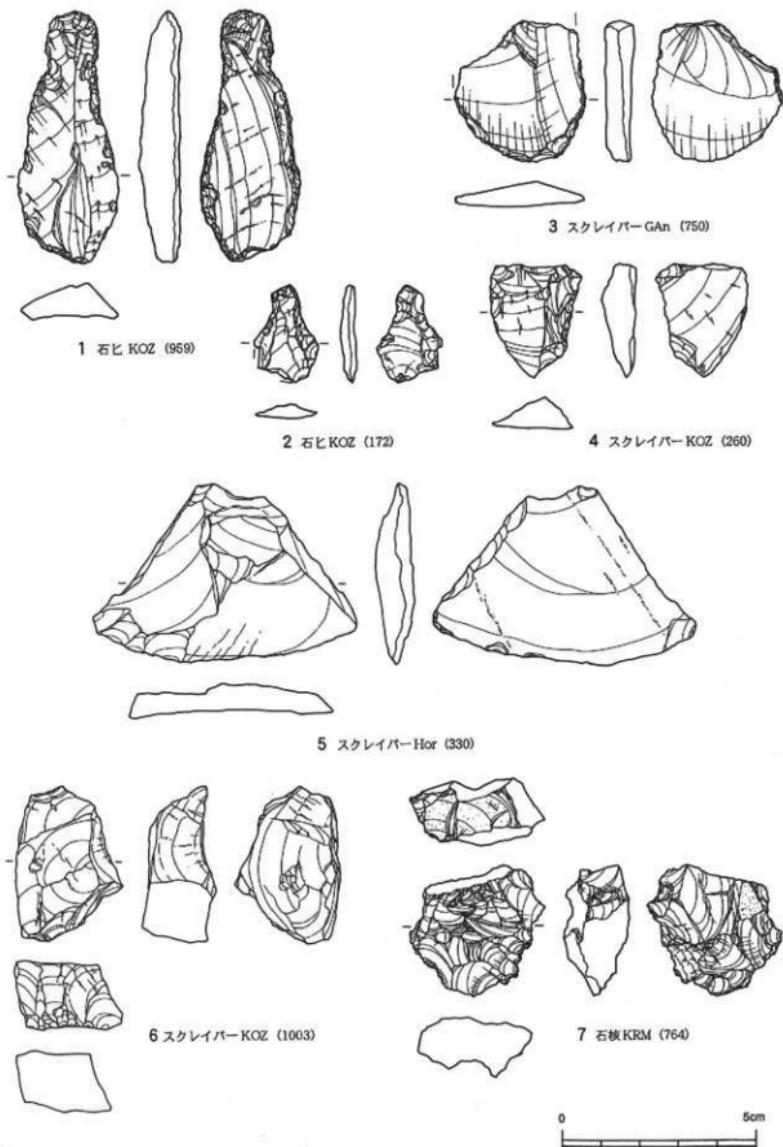
黒耀石製の石核が総数9点出土している。前の剥離面を打面として90度、180度と打面転移をくり返し、幅広の小形の剥片を剥ぎ取っている。



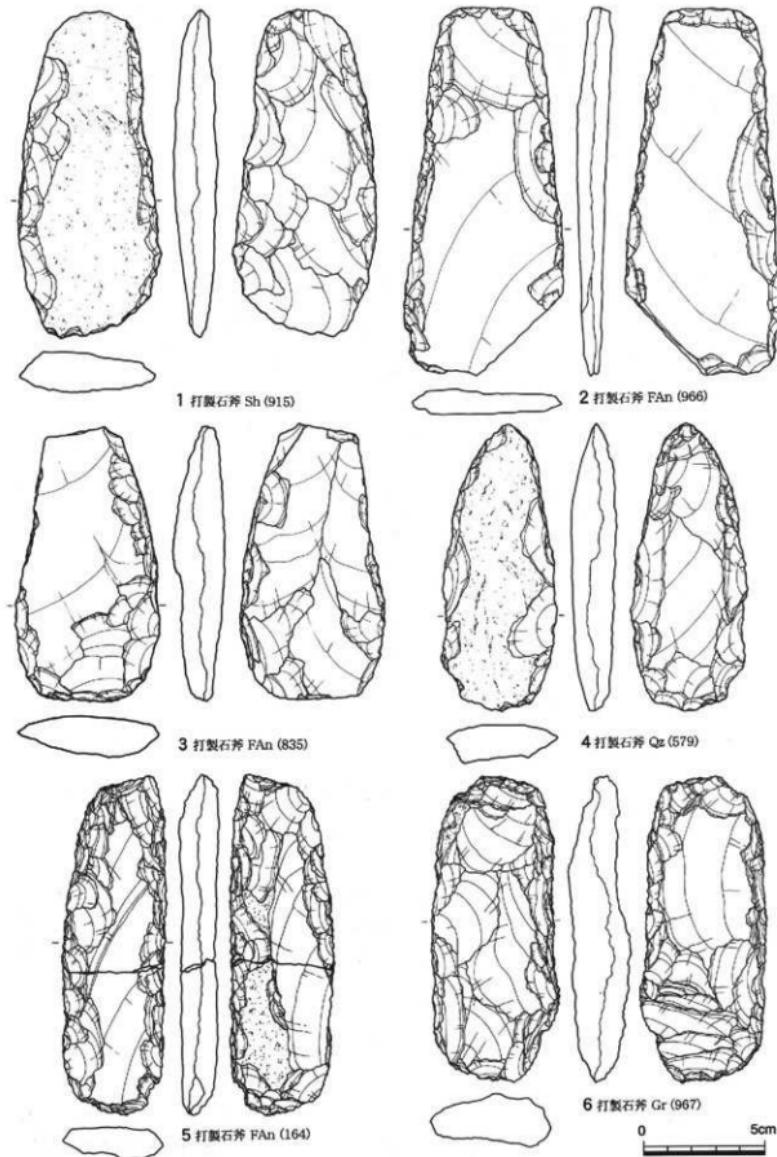
第22図 石器実測図1



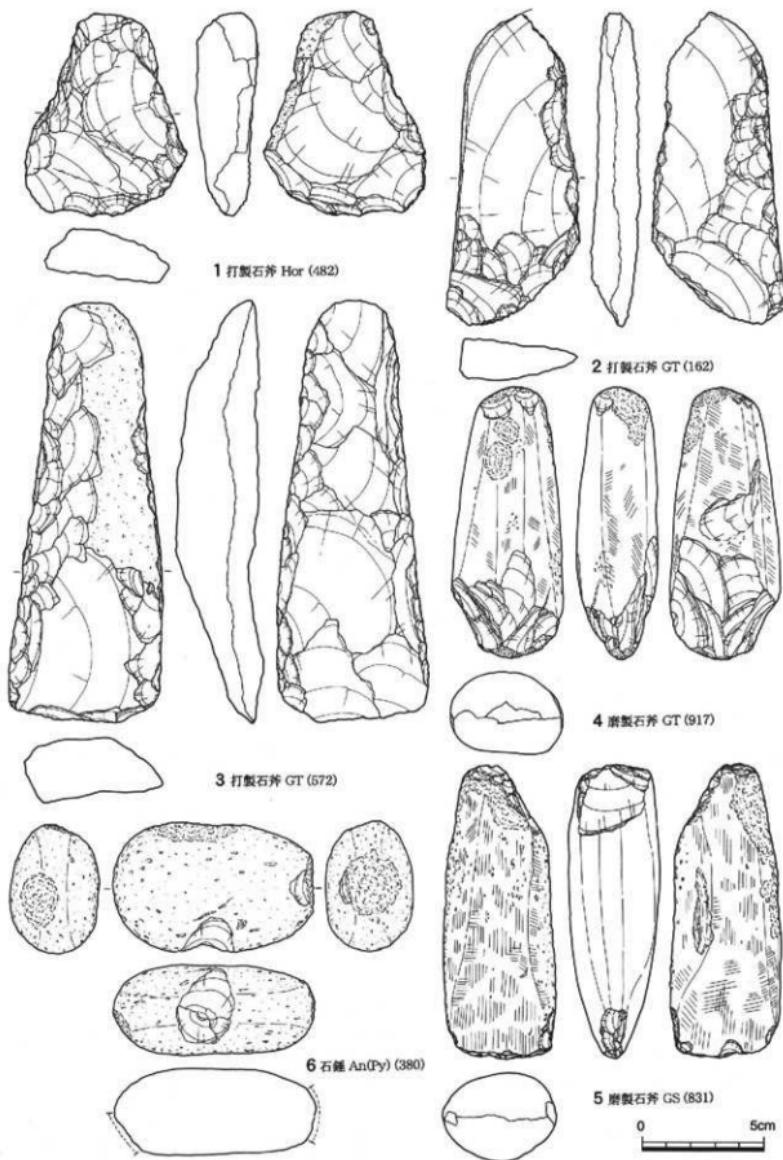
第23図 石器実測図 2



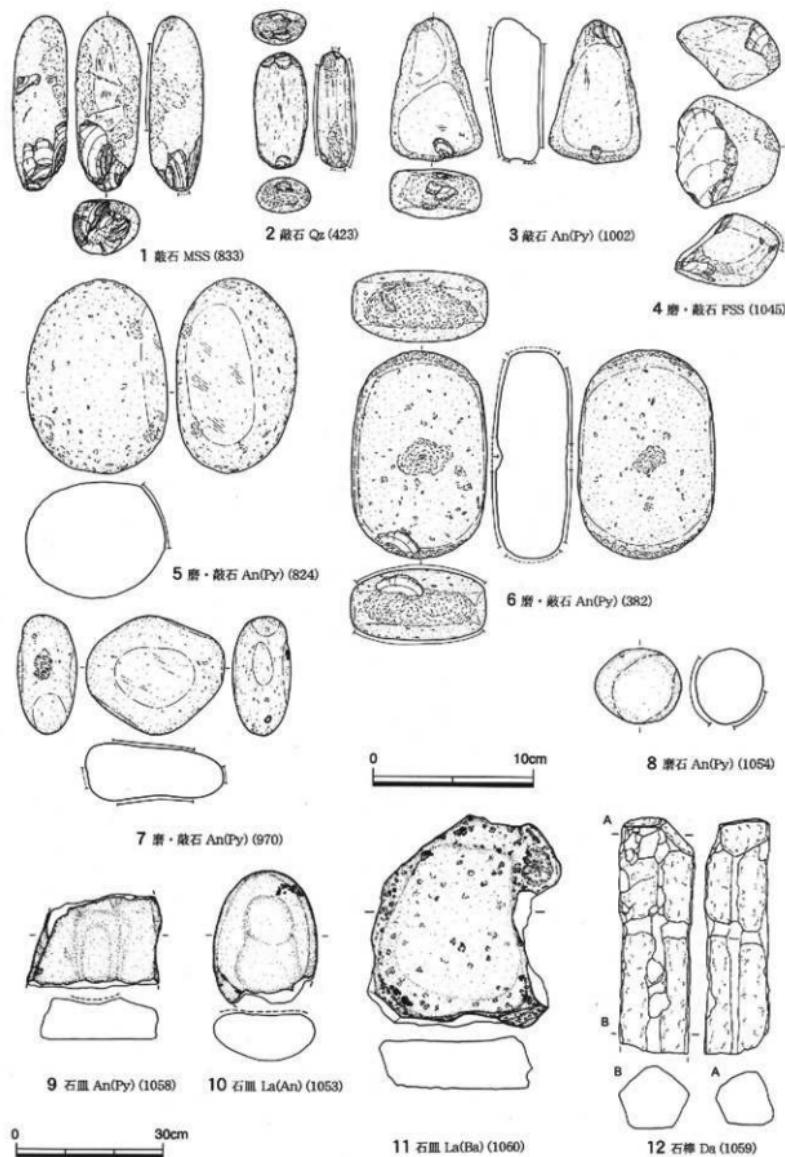
第24図 石器実測図 3



第25図 石器実測図4



第26図 石器実測図 5



第27図 石器実測図 6

第11表 石器観察表

器種	層位・遺構	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
尖頭器	表土	S0556	風磨石(須賀系)	[54.0]	[21.0]	11.0	[10.6]	基部欠損
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
22-2	石鏃	S0014	風磨石(須ヶ峰系)	[23.0]	13.0	6.0	[1.7]	欠損
22-3	石鏃	S0267	風磨石(神津島)	19.0	17.0	5.0	0.9	
22-4	石鏃	S0311	風磨石(神津島)	[20.0]	[14.0]	[4.5]	[1.0]	断端欠損
22-5	石鏃	S0470	風磨石(須ヶ峰)	20.0	14.5	5.0	1.0	
22-6	石鏃	S0210	風磨石(須ヶ峰系)	[24.5]	[21.0]	[4.2]	[1.9]	先端部欠損
22-7	石鏃	S0554	風磨石(須ヶ峰)	25.0	19.0	4.0	1.5	
22-8	石鏃	S0057	風磨石(神津島)	20.5	19.0	4.0	6.8	
22-9	石鏃	S0670	風磨石(神津島)	[29.5]	[15.0]	[5.0]	[1.5]	断端欠損
22-10	石鏃	S0761	風磨石(神津島)	33.0	16.0	8.0	0.9	
22-11	石鏃	S0759	風磨石(須ヶ峰系)	20.0	16.5	4.0	3.1	
22-12	石鏃	S1031	風磨石(神津島)	22.0	20.0	5.0	1.6	
22-13	石鏃	S1029	風磨石(須ヶ峰系)	29.0	18.5	5.0	1.6	
22-14	石鏃	S0760	風磨石(神津島)	[15.5]	[17.5]	[4.1]	[0.8]	先端部欠損
22-15	石鏃	S0555	風磨石(須ヶ峰)	[15.0]	[19.0]	[6.0]	[1.2]	先端部欠損
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
22-16	楔形石器	S0266	風磨石(須ヶ峰系)	18.0	11.0	7.0	1.4	
22-17	楔形石器	S0438	風磨石(神津島)	15.0	10.0	8.0	1.2	
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
23-1	石匕	S0826	ホルンフェルス	42.0	64.0	11.0	24.0	
23-2	石匕	S0002	夷狀器	50.0	78.0	9.0	29.9	
23-3	石匕	S0427	ホルンフェルス	[47.0]	[67.0]	[9.0]	[24.0]	欠損
23-4	石匕	S0085	ホルンフェルス	51.0	61.0	12.0	17.4	
24-1	石匕	S0059	風磨石(神津島)	65.0	25.0	9.0	13.5	
24-2	石匕	S0172	風磨石(神津島)	[24.0]	[17.0]	[4.0]	[1.4]	欠損
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
24-3	スクレイパー	S0750	ガラス質灰色安山岩	[35.0]	[33.0]	[6.5]	[8.9]	欠損
24-4	スクレイバー	S0260	風磨石(神津島)	29.0	23.0	8.0	4.8	
24-5	スクレイバー	S0330	ホルンフェルス	44.0	68.0	10.0	23.6	
24-6	スクレイバー	S1003	風磨石(神津島)	40.0	27.0	15.0	16.1	
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
24-7	石核	S0764	風磨石(須ヶ峰系)	33.0	34.0	15.0	14.3	
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
25-1	打製石斧	S0915	頁岩	133.0	57.5	18.5	190.0	
25-2	打製石斧	S0966	片状錐狀安山岩	151.0	64.5	18.0	190.0	
25-3	打製石斧	S0835	片状錐狀安山岩	113	59.5	21.5	150	
25-4	打製石斧	S0579	珪岩	116.0	48.0	19.0	150.0	
25-5	打製石斧	S0164	片状錐狀安山岩	138.0	41.0	16.0	130.0	
25-6	打製石斧	S0967	硬砂岩	124.0	51.0	235.0	200.0	
26-1	打製石斧	S0482	ホルンフェルス	83.0	65.5	25.0	150.0	
26-2	打製石斧	S0162	綠色凝灰岩	[122.0]	[52.0]	[19.5]	[170.0]	欠損
26-3	打製石斧	S0572	綠色凝灰岩	172.5	61.5	33.0	430.0	
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
26-4	磨製石斧	S0917	綠色凝灰岩	112.0	34.0	45.5	250.0	刃部破損
26-5	磨製石斧	S0831	綠色片岩	120.0	45.5	38.0	340.0	基部破損
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
26-6	石錐	S0380	輝石安山岩	82.0	54.0	37.0	220.0	
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
27-1	敲石	S0833	中粒砂岩	109.0	40.5	34.0	240.0	
27-2	敲石	S0423	珪岩	73.0	33.0	23.0	100.0	
27-3	敲石	S1002	輝石安山岩	8.545	14.894	98.94	200	
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
27-4	磨石	S1045	繊粒砂岩	64	70	46	250	
27-5	磨石	S0824	輝石安山岩	121.0	87.5	75.0	1150.0	
27-6	磨石	S0382	輝石安山岩	106	69	36	850	
27-7	磨石	S0970	輝石安山岩	85	75	37	350	
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
27-8	磨石	S1054	輝石安山岩	54	46	42	150	
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
27-9	石刀	S1058	輝石安山岩	[196.0]	[278.0]	[81.0]	[7100.0]	欠損・炉石
27-10	石刀	S1053	安山岩質變質岩	[274.0]	[214.0]	[100.0]	[855.0]	欠損
27-11	石刀	S1060	玄武岩質變質岩	440.0	400.0	148.0	23000	
四面刃	器種	遺物No.	石材(産地)	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
27-12	石刀	S1059	デイサイト	[489.0]	[156.0]	[134.0]	[1350.0]	欠損

第12表 出土石器組成表

	尖 頭 部 部	石 頭 部 部	櫛 形 石 部	石 頭 部 部	ス ク レ イ バ ー 部	石 頭 部 部	打 製 石 部	磨 石 部	石 頭 部 部	磨 石 部	敲 石 部	・ 磨 石 部	石 頭 部 部	石 頭 部 部	石 頭 部 部	そ の 他 部	個 数 合 計	重 量 合 計 ( g )		
黒曜石	1	14	11	2	2	9											783	822	1176.6	
デイサイト																1	1	3	2054.6	
流紋岩					1											2	2	5	772.1	
安山岩質岩																1	2	6	2656.6	
ガラス質黑色安山岩			1													5	6	92.1		
輝石安山岩							1		1	1	2	25	5			16	51	2909.0		
細粒安山岩							17									14	31	1597.6		
片状斜長岩質岩							6									2	8	958.0		
中粒安山岩																1	1	249.1		
玄武岩質岩									3	1	2	1				7	7	2535.6		
玄武岩									1	2	6					4	13	3746.3		
粗粒玄武岩																1	1	178.8		
細粒斜長岩							1										1	1	29.3	
石英閃岩																	1	1	99.6	
閃長岩																2	2	192.7		
ホルンフェルス	5	1	1													19	22	588.9		
珪岩							1			1						2	2	250.0		
綠色片岩								1								1	1	340.0		
角閃石片岩																2	2	8.2		
細粒綠色凝灰岩																1	1	81.5		
綠色斑岩			8	2												8	18	2462.4		
角隕石斑岩				1												1	1	260.0		
火山礫斑岩				1													1	1	125.2	
細粒砂岩					1											3	7	460.4		
中粒砂岩				1					1	3						4	9	1318.1		
粗粒砂岩											1					1	1	49.5		
礫砂岩			3							1						3	7	749.3		
細砾岩																1	1	193.7		
瓦岩			4	1												6	11	649.9		
粘板岩																1	1	8.9		
赤玉石																2	2	36.7		
水晶																1	1	48.2		
不明						1										9	10	45.4		
個數合計	1	14	11	8	4	9	47	4	1	6	7	50	7	1	886	1056				
重量合計(g)	1125.3	19.3	206.2	53.4	155.7	6191.1	1000.0	220.0	845.2	1720.0	21278.0	38675.0	1350.0	4179.7				75929.7		



第28図 出土石器組成グラフ

## 第5章 調査区内における遺物分布状況

発掘調査段階で遺物の取り上げにトータルステーションを用いたため、遺物の出土位置を座標でとらえることができ、そのデーターをもとに分布図を作成した。こうした分布図は、調査時に確認できなかつた事実を明らかにしたり、調査者以外に検証可能な資料を提示する可能性があるが、一方、それはあくまで二次資料的なデーターであり、出土状況の臨場感までを伝えられるものではないという限界性をもつ。よって、提示した分布図に対して、たとえ不十分でも、何らかの解釈を行うのが調査者の責務であろうと考える。ここではまことに拙稿ながら分布図から読みとれることを出土状況による所見も加えて考察してみる。

### 分布図の見方

遺構図をみれば明らかなように、確認できた覆土層の堆積は薄く、住居は掘り方の底面近くになってようやく確認できたものがほとんどであり、表土～3層とした遺物の包含層の中に確認できなかった遺構の覆土が存在した可能性は高い。よって、本報告書では本調査対象区内の表土から遺構内まで点で取り上げたものはすべて分布図の中に表示することにした。

分布図は土器と石器の分布図を分け、土器は接合資料の分布図を別に提示しているものもある。石器は実測図を掲載したものすべて分布図に提示したが、土器は接合・大破片資料のみを提示している。また、土器の個体別や石器の器種別にマークを替えており、マークは各図の凡例参照されたい。垂直分布は平面分布上に枠のあるものは、繁雑なため、内枠のみを図示対象としたものだが、実測図を提示したものに関しては枠外のものも点示した。なお、ここでは早・前期の資料、土製品は少數のため考察の対象としてない。

### 調査区全体の遺物分布状況（第29～31図）

提示した分布図は当然、集落廃絶後の自然環境、後世の土地利用の影響を大きく受けていることであろう。特に大きな遺構・遺物の攪乱は受けないが、雜木林や耕作地という土地利用の影響により、小さな遺物ほど土の中での移動は大きいと思われる。しかし、一方で出土した遺物の平面分布図をみると、遺構に集中して分布する状況がみられ、特に土器は住居跡に高密度に検出している。なかでもSB-2・SB-3・SB-5・SB-6などが明確である。しかし、土器は掲載した実測図を見ても明らかのように、破片資料が主体で、床面に据えられていた状態で検出した遺物はない。土器の接合資料もおおむね掘り方直上から離れた位置から出土しており、大がかりな一括廃棄が行われたという状況は考えにくい。

石器では特に黒耀石の剥片類が多く出土しており、分布図の主体をしめる。多くが1g前後の細片であり、使用痕をもつものも少なくない。石核も少なからず出土していることからも、集落付近で石器の製作・加工を行っていたことは間違いないが、住居跡内から土器破片と似たように分布することは何を意味するのであろうか。「はらやま遺跡」（調布市原山遺跡調査会 1993）では同様の状況を「廃棄の重なりや、のちの土地利用の影響などの結果として形づくられたもの」と考えているが、本遺跡でも同様であることは、その傍証となるであろうか。

#### S B-1 の出土遺物分布（第32・33図）

全体的に他の住居跡に比べ遺物の密度がやや低い。平面分布は炉周辺と壁際に集まる傾向がみられ、垂直分布も壁際に集まる傾向を示し、掘り方の直上から60cmほどの広い幅で分布する。特に土器の分布にその傾向が強い。このことは石器の多くが黒羅石の微細な剥片であり、土の中で移動しやすいためかもしれない。土器片も小破片資料が多いことなどもあり、一括廃棄ではなく、自然埋没土のなかに遺物が混入したと解釈する。

#### S B-2 の出土遺物分布（第34・35図）

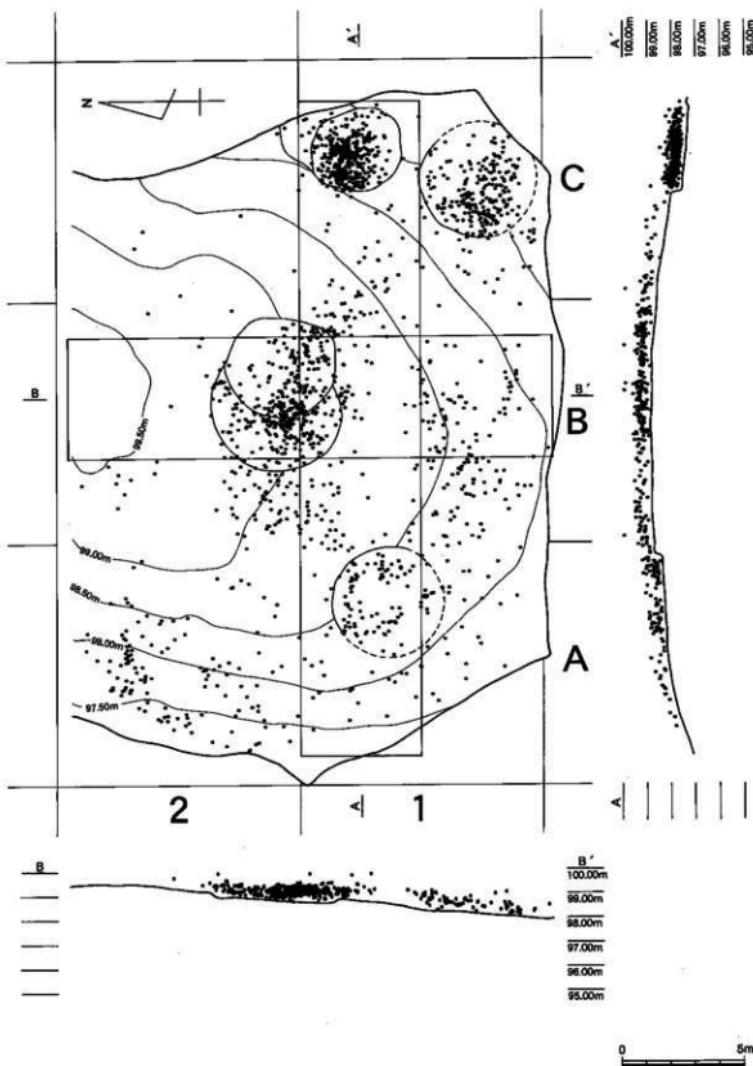
平面分布は遺構全体に散らばるが、壁際に少なく、やや西側に密に分布するようにみえる。垂直分布は断面Aと遺構断面図を比較すると明らかのように、遺構の確認面・炉の検出面に沿うようにみられる。特に土器の分布が明瞭である。石器は傾向を同じくするも北側の掘り方直上でもみられる。S B-1と同様の理由によるものであろうか。掘り方で確認した柱穴が浅いことも考慮すると、2層上面を床面とすべきであろう。貼床の可能性も考えられるが、廃絶した住居跡を利用した可能性もある。土器片は小破片資料が多いことなどもあり、S B-1同様、自然埋没土のなかに遺物が混入したと解釈する。

#### S B-3・4 の出土遺物分布（第36・37図）

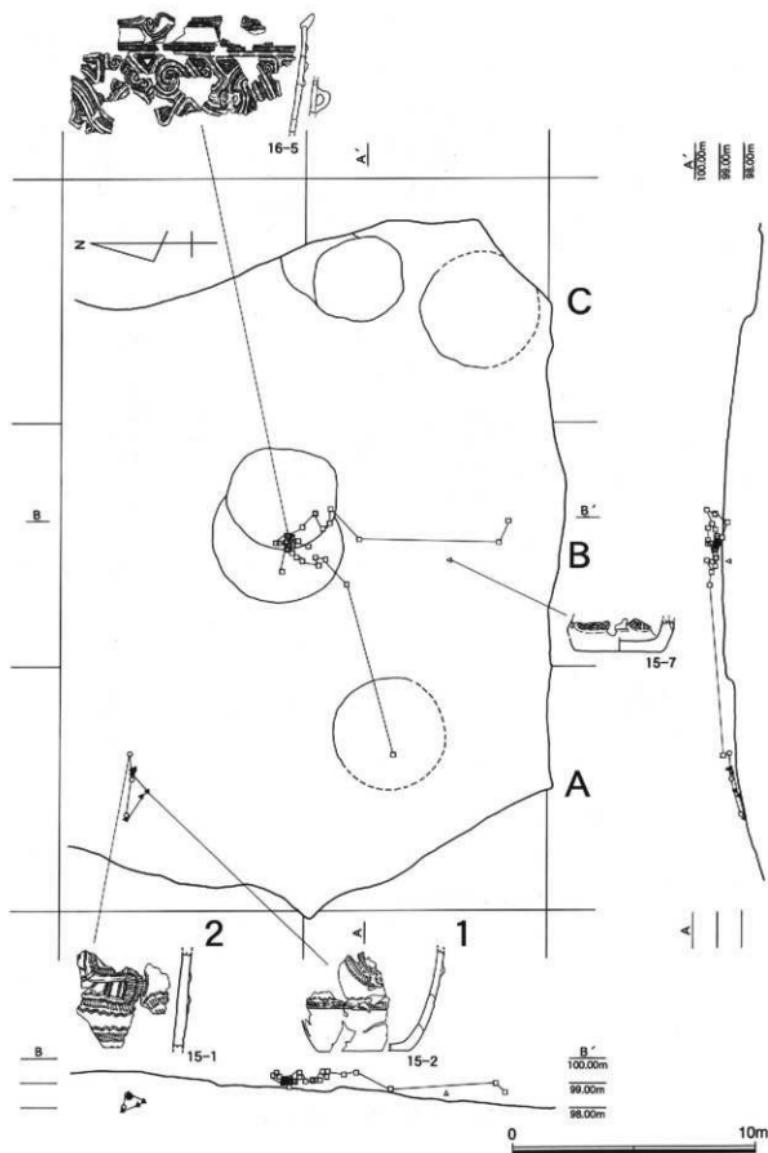
平面分布、垂直分布ともS B-3に集中し、S B-4からはほとんど出土しない。垂直分布はさらに中心部が密になる状況が看取でき、中心部に向かって落ち込むようにみられる。土器の接合資料をみても同様のことがいえよう。また、石皿（27-9）が転用して炉石として使用され、石皿（27-10）も重なるように出土している。石皿以外の遺物は竪穴の覆土堆積が進んでから廃棄、もしくは流れ込んだものと思われる。

#### S B-5・6 の出土遺物分布（第38～40図）

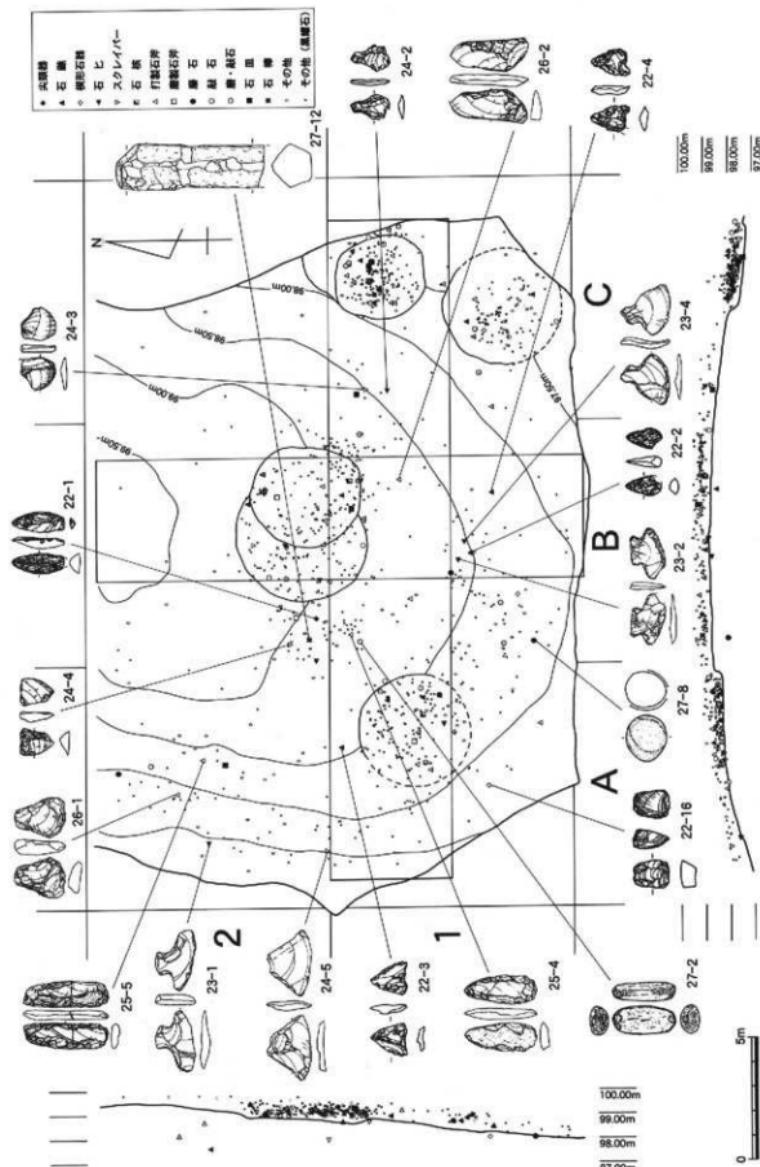
平面分布は遺構全体に散らばるが、やや北側が粗に分布するようにみえる。土器の分布はS B-6炉の付近とS B-5南東部で濃密に出土している。垂直分布は、断面A・Bと遺構断面図を比較すると明らかなように、遺構の確認面に沿って遺物の分布がみられ、炉周辺に集中する。S B-5によって破壊された炉周辺に遺物が集中するのは問題があるが、垂直分布により竪穴の覆土堆積が進んでから遺物が廃棄されたものと考えられ、土器の接合資料分布図からも遺物の流れ込む状況が確認できることから、S B-6覆土内の土器（16-5）などがS B-5覆土に流れ込んだものと思われる。



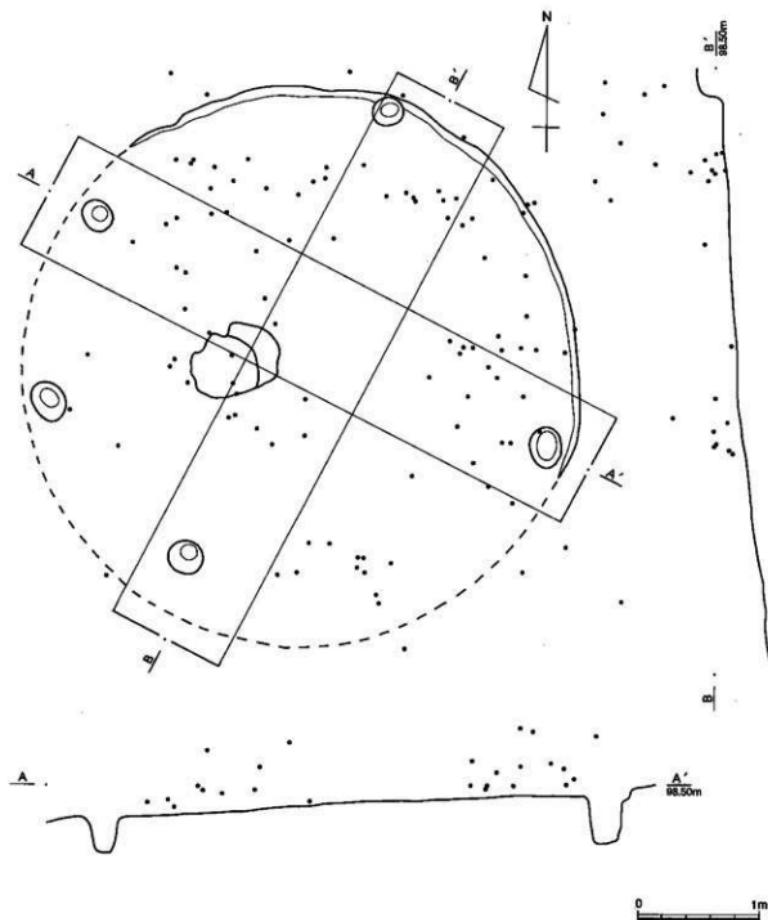
第29図 繩文時代中期土器分布全体図



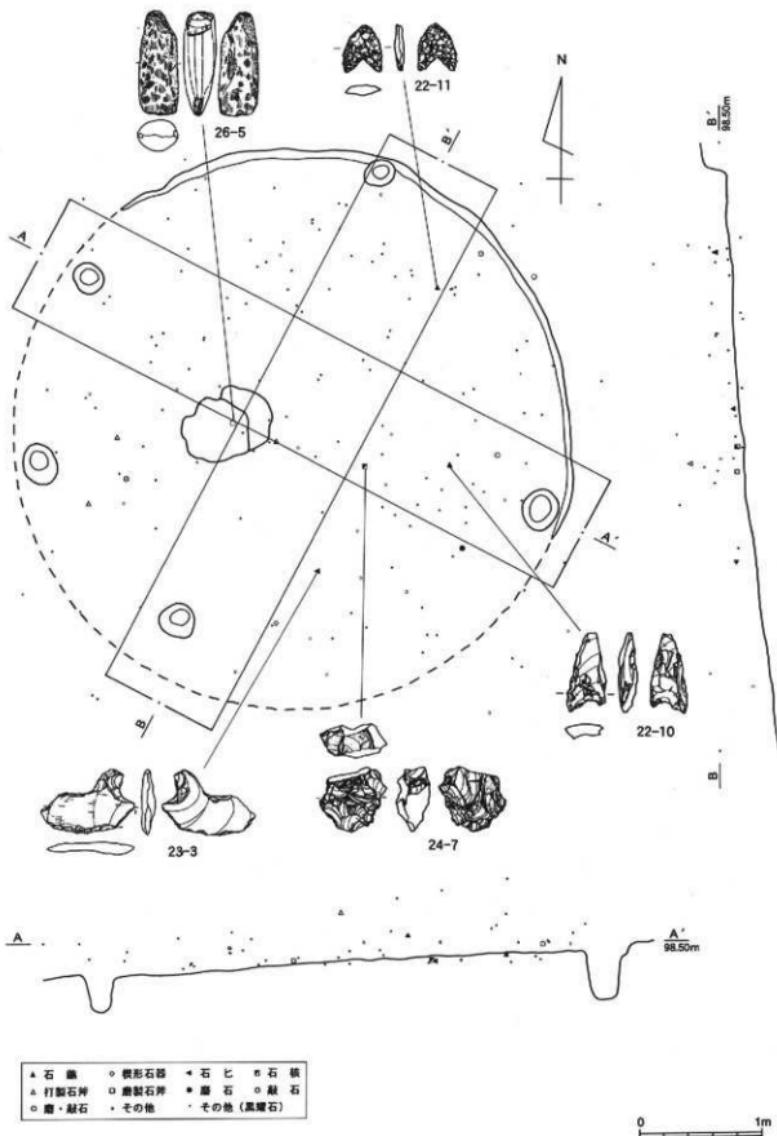
第30図 接合資料土器分布全体図



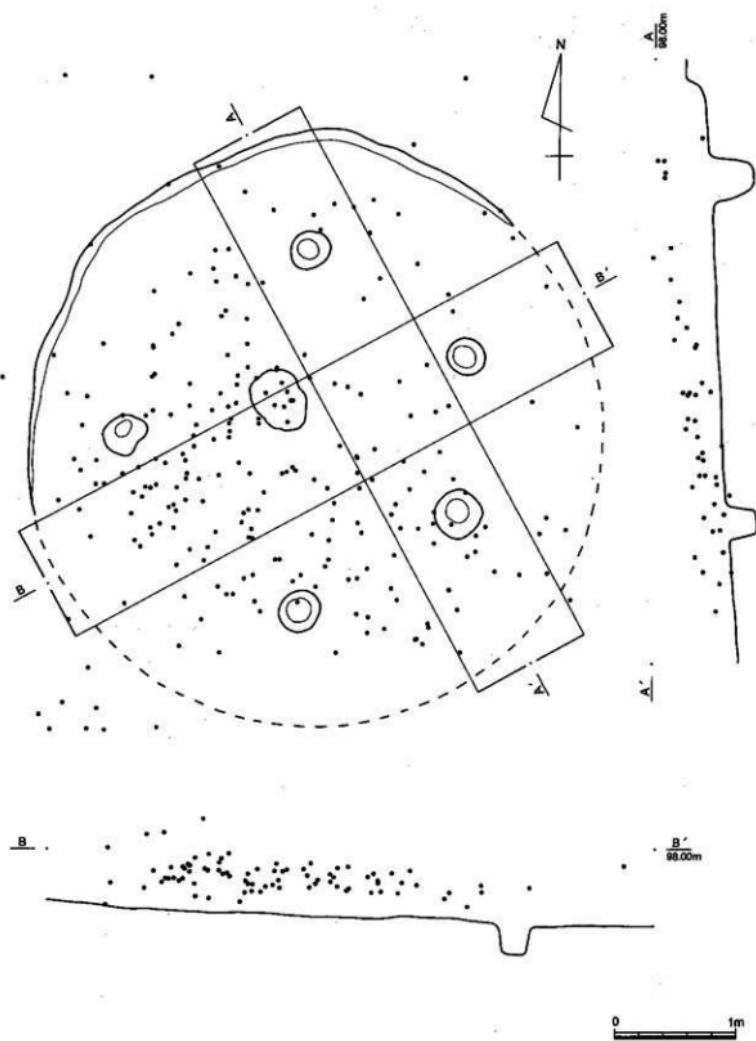
第31図 石器分布全体図



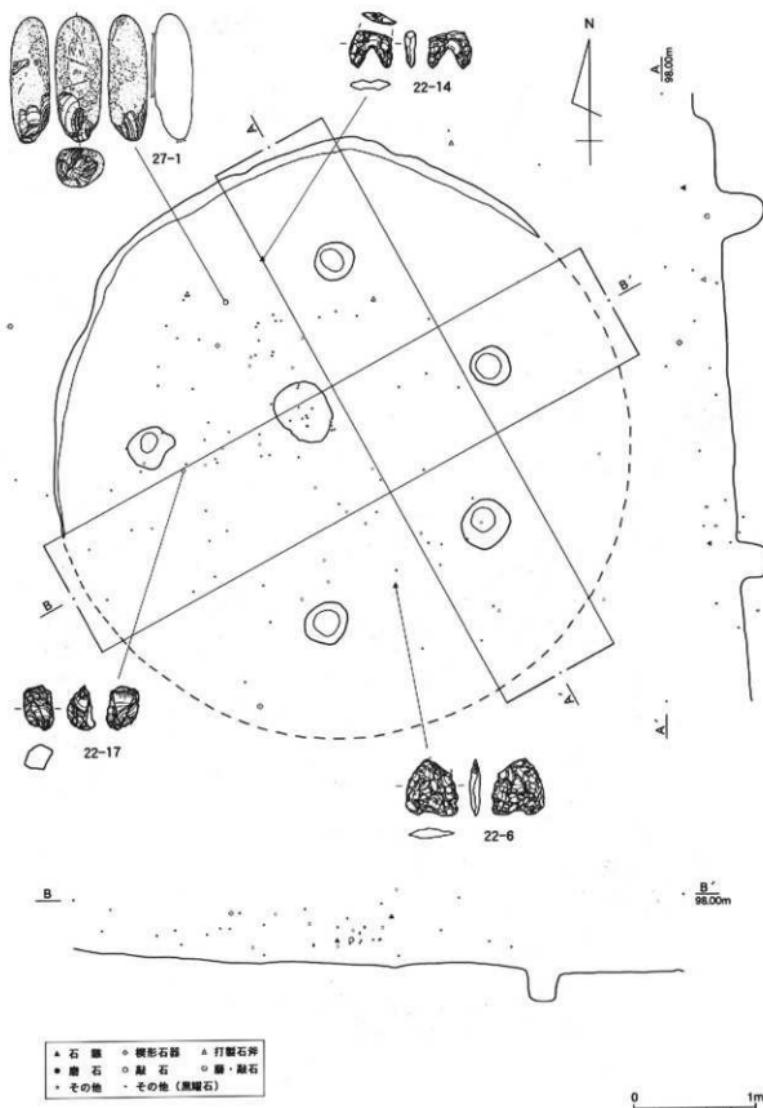
第32図 SB-1 土器分布図



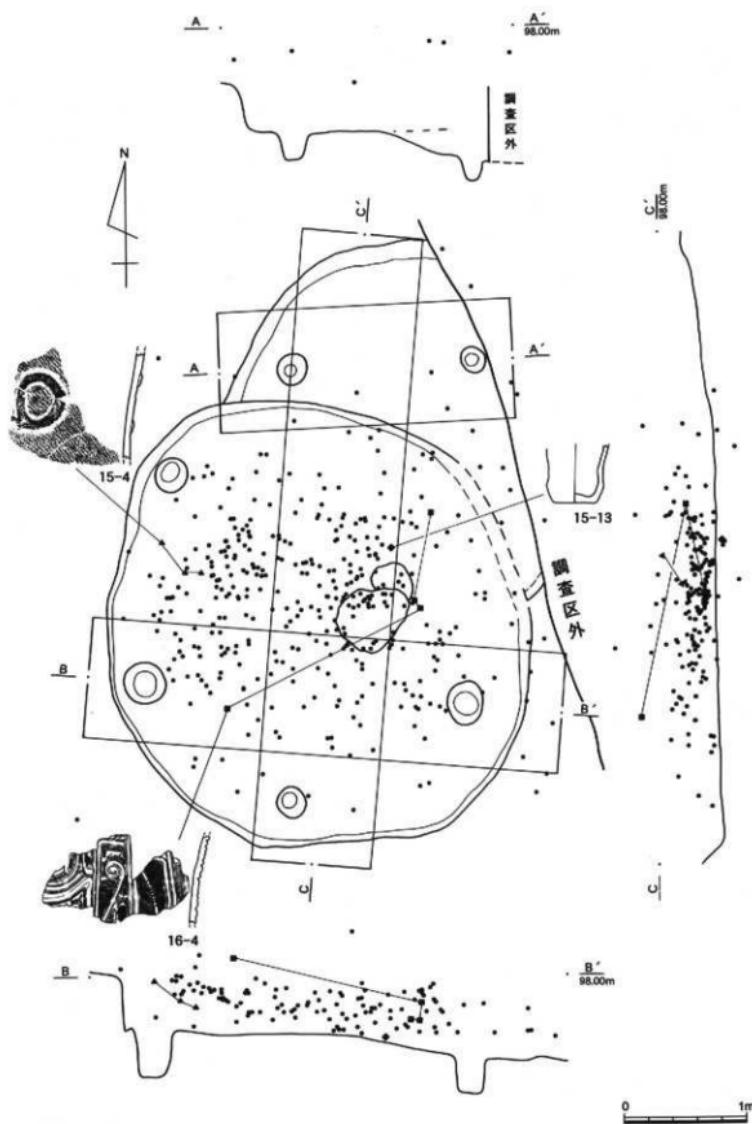
第33図 SB-1 石器分布図



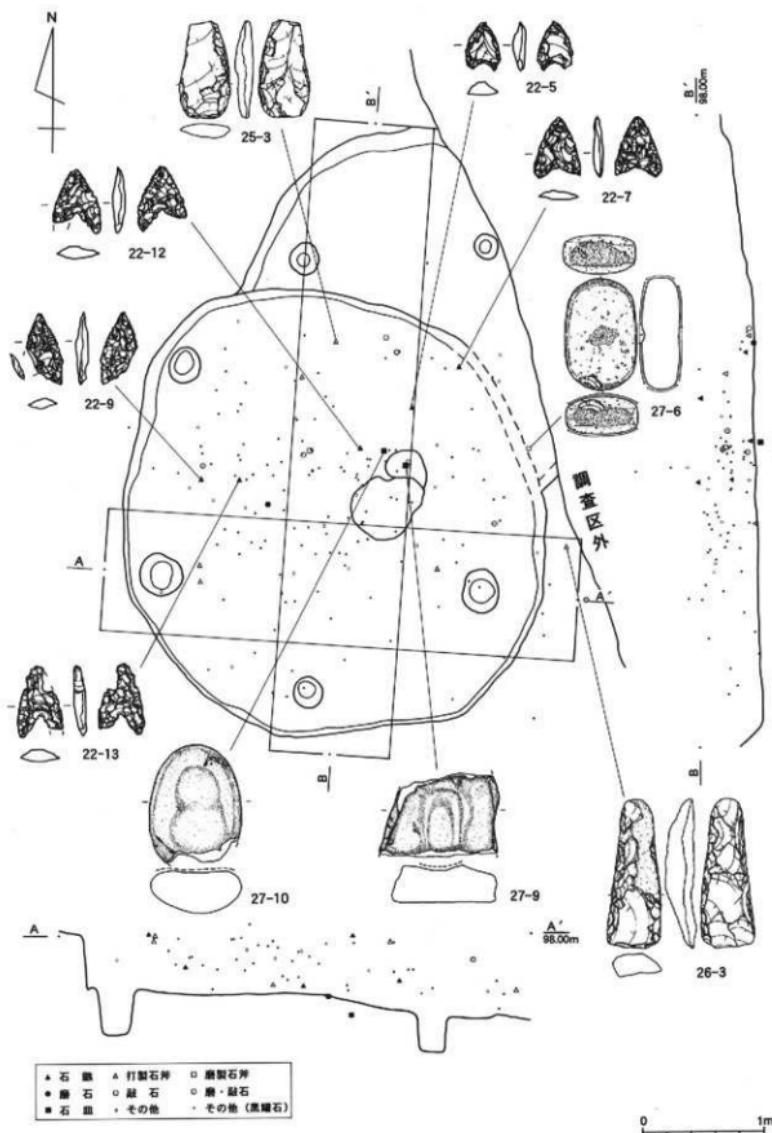
第34図 SB-2 土器分布図



第35図 SB-2 石器分布図

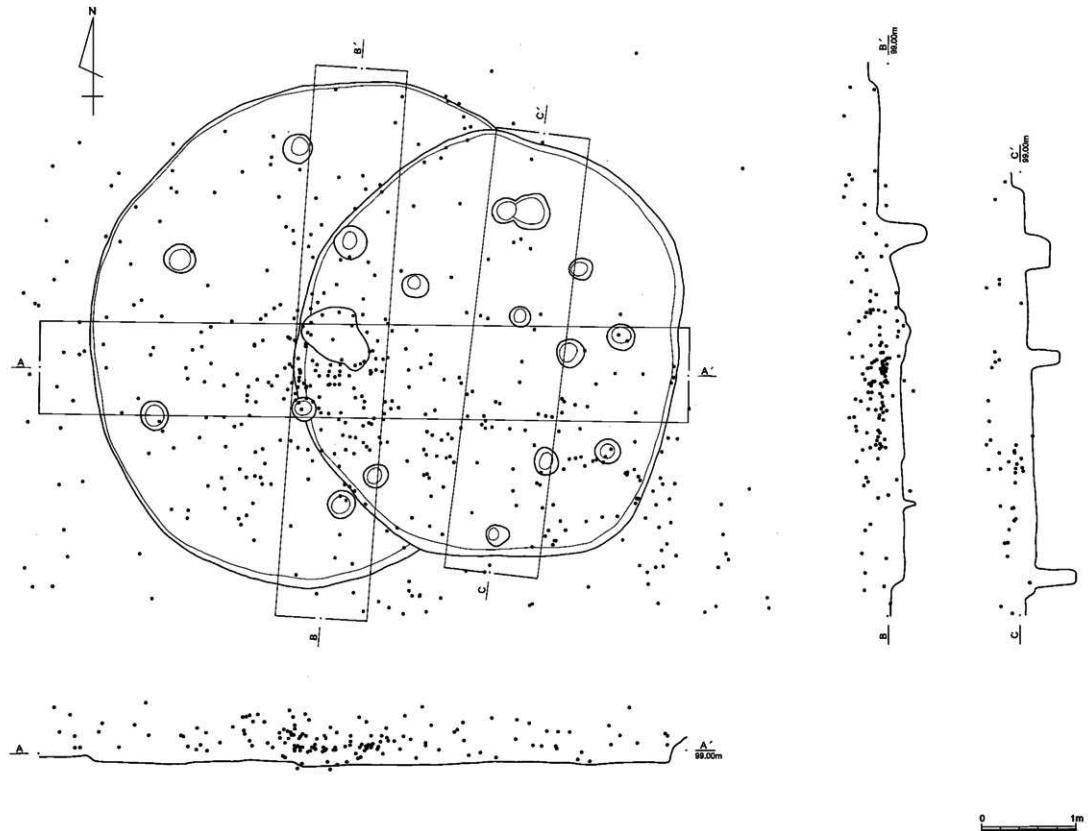


第36図 SB-3・4土器分布図

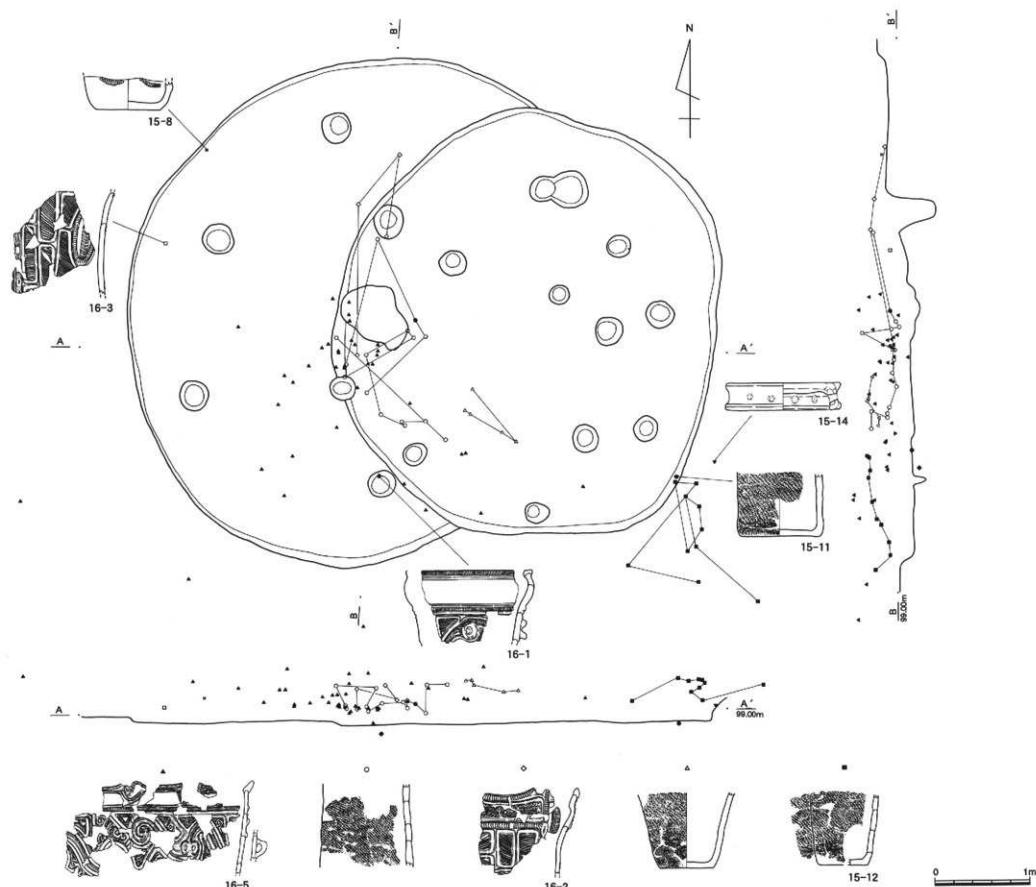


第37図 SB-3・4 石器分布図

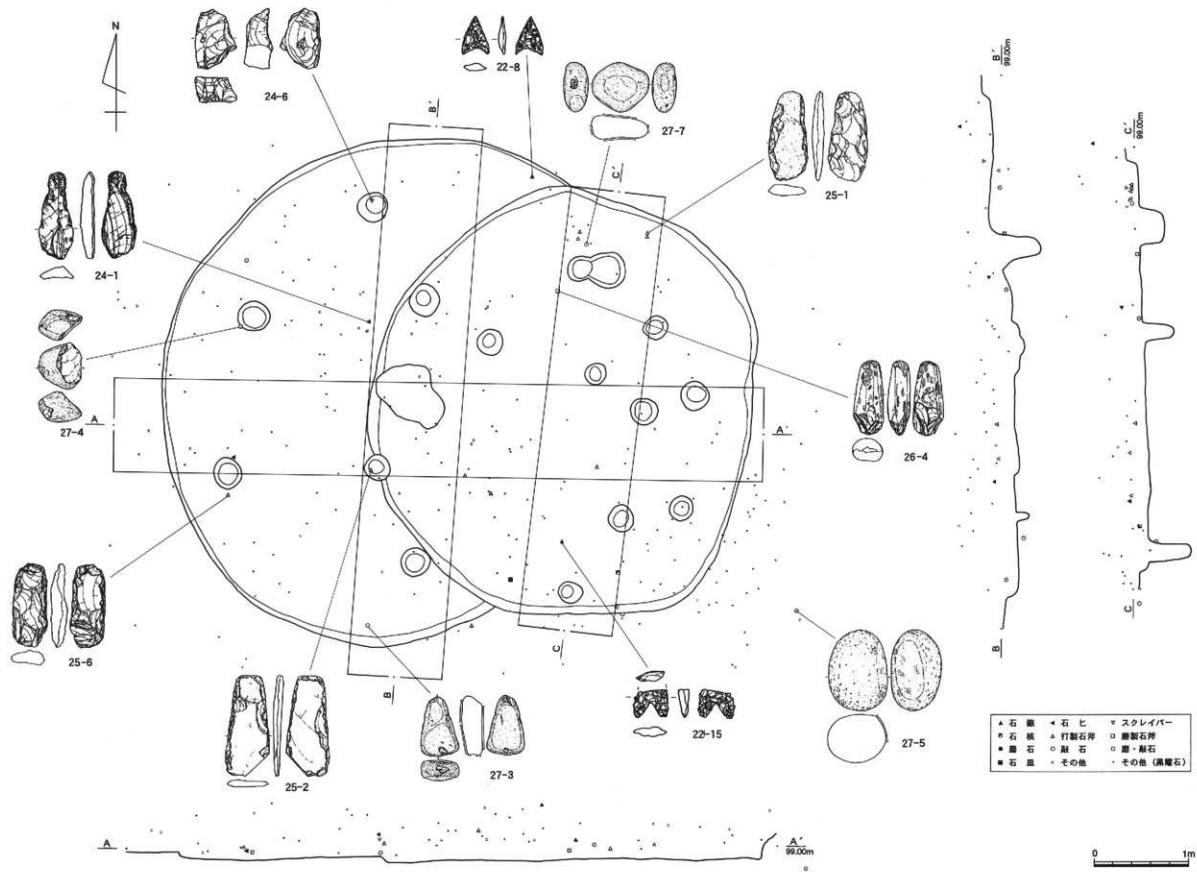




第38図 SB-5・6土器分布図



第39図 SB-5・6 接合資料土器分布図



第40図 S日-5・6石器分布図

## 第6章 調査の成果と課題

### 遺構

住居跡に関しては出土遺物が基本的に遺構廃絶後のものと思われ、厳密には遺構に伴うものではない。しかし、次に続く段階の縄文の土器群がみられないことや、添石炉や簡単な石囲炉の形態や住居形態を考慮するすれば中期中葉（より限定すれば勝坂Ⅲ・Ⅳ段階）に比定できるであろう。検出した住居跡は6軒（ピット群を含めて8軒）で、一時期の集落の数を想定したい所だが、遺構の残存状態がきわめて悪く、遺構ごとの遺物に時期差を見いだせないこともあり、明確なことはいえない。しかし、遺構の切り合いや上屋構造に必要な空間を考慮すれば最大で3軒程度ではないかと推測する。同規模の集落が本遺跡より東に800m程離れた「小池遺跡」で検出しておらず、立地や遺構の構造、出土遺物の内容など共通項が多い。愛鷹・箱根山麓の縄文時代中期集落は池谷信之氏により遺構・石器組成から中規模集落と小規模集落分類されているが（池谷 1994）、やや床面積が広く、住居跡の数も多いため、小規模集落の範疇に入らないものになってしまふ。今後、遺構の同時期性をより厳密にとらえ、各集落遺跡の性格と遺跡間の関係を考察する研究方法の開発とそれに有効な資料の増加が望まれる。

### 土器

勝坂ⅡからVI、特にⅢ段階を中心とした狭い年代幅でとらえられることが本遺跡の特徴にあげられよう。また、中部高地に類似する霧囲気を有するものもあり、注目される。しかし、多くが破片資料であり、それにもまして調査者の不勉強もあって、事実記載にとどまり、その特長を生かした十分な検討はできなかつた。

### 石器

前述の池谷論文において愛鷹・箱根山麓の縄文時代中期集落の石器組成が掲載され、「打・礫斧」がほとんどの遺跡で最も多く出土する器種であり、本遺跡も器種組成においては、蔽・磨石に次いで打製石斧が多く出土していることが注目される（第12表・第28図）。このことは土器の類似性とあわせて中部高地、中期農耕論との関係が考慮されよう。しかし一方、黒耀石が細片を含めて822点出土しており、石材を含めた点数としては最も多く出土している。黒耀石を使用する器種としては石鏃、楔形・スクレイバー類などがあげられ、比率的には石鏃が多い。石鏃のような小形の石器や細片は自然条件や後世の土地利用の影響を受け流失しやすく、見落とす可能性も高いであろう。そう考えるならば狩猟具は見かけの数よりかなり多いものと考えられよう。また、石材による器種の選択志向性も伺えるが、出土遺物点数の母集団が小さいこともあり、判断は慎重にならざるえなく、今後より精緻な遺跡ごとの資料の増加によってこうした問題を明らかにしていく必要があろう。

### 遺物出土状況

出土座標が明らかな遺物を点示し、遺跡・遺構と遺物の関係を考察した。この手法は「はらやま遺跡」を参考にした、というより粗雑なコピーというべきかもしれないが、遺構を確認できた段階がほぼ住居の掘り方であった今回の調査ではとても有効であったと思われる。しかし、調査段階での問題意識が十分でなかったため、その有効性をより生かすような考察はできなかつた。また、土器の破片資料についてはヴァリエーションの抽出のみで、紙面と時間と能力不足のため、出土状況に反映できなかつた。可能であるならば他日をもって再検討したい。

## おわりに

本報告書では、他者による検証が可能になることを重視し、限られた紙幅の中で可能な限りわかりやすいように努めたつもりである。県内の当該期住居の検出例も少ないこともあり、資料の増加と調査手法の深化をまち、当地域の全体的な視野からの再検討の必要性があろう。その際の一資料として本報告書が役立てば、調査者の目的は達成されることになる。しかし、調査者の能力不足により、その意図に反してわかりにくい部分や方法上の欠陥については諸賢の建設的な意見を仰ぎたい。

- 注1) 池谷氏は愛鷹・箱根山麓の縄文時代中期集落を遺構と石器組成から中規模集落と小規模集落に分類している。中規模集落は一型式内で住居跡が數軒以上、床面積平均18~21m<sup>2</sup>であり、小規模集落は一型式内で住居跡が3軒以下、もしくは未検出ではっきりしないものが多く、埋甕を伴わなわず、床面積9~12m<sup>2</sup>で磨製石斧がないか、あっても稀なことをあげている。
- 注2) 今福利恵氏の御教授による。

## &lt;参考文献&gt;

- 芦川忠利・池谷初恵 1990 『三島スプリングスC.C場ゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』 三島市教育委員会
- 安孫子昭二 1965 『縄文土器大観2』 小学館
- 池谷信之 1990 『広合遺跡(b・c・d区) 広合南遺跡発掘調査報告書』 沼津市教育委員会
- 池谷信之 1991 『広合遺跡(e区) ニツ洞(a区) 遺跡発掘調査報告書』 沼津市教育委員会
- 池谷信之 1994 『愛鷹・箱根山麓の縄文中期集落と石器保有』『地域と考古学』 向坂鋼二先生還暦記念論集
- 伊藤昌光・馬淵野行雄・渡井一信 1983 『若宮遺跡』 富士宮市教育委員会
- 今福利恵 1990 『勝坂式土器様式の個性と多様性』『考古学雑誌』76-2
- 今福利恵 1993 『勝式土器成立期の集団関係』『研究紀要 9』 山梨県立考古博物館
- 浦志真孝・池谷信之 1998 『静岡県における勝坂式土器の地域的様相』『縄文時代中期前半の東海系土器群』予稿集 静岡県考古学会
- 塗畠 稔 1982 『修善寺大塚』修善寺町教育委員会
- 小野真一他 1971 『上長窪遺跡群』長泉町教育委員会
- 折井 敦 1977 『八ヶ岳南麓における縄文中期の炉形態の変遷に関する一考察』『長野県考古学会誌』28長野県考古学会
- 龜田宗宏・平川昭夫 1990 『上山地遺跡』長泉町教育委員会
- 黒尾和久 1995 『縄文中期集落遺跡の基礎的検討』『論集 宇津木台』第1集
- 黒尾和久・佐伯直世・渡江芳浩編 1993 『はらやま』上下巻 調布市原山遺跡調査会
- 笠原千賀子・井上隆・夏目不比等 1998 『小池遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 静岡県 1990 『静岡県史 資料編1 考古1』
- 静岡県 1992 『静岡県史 資料編3 考古3』
- 静岡県教育委員会 1969 『田方郡修善寺町入谷平遺跡緊急調査概要』
- 縄文集落研究グループ 1995・1998 『縄文集落の新地平』1・2
- 鈴木敏中 1984 『一般国道1号三ツ谷バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』 建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・三島市教育委員会

- 鈴木通之助 1991 「図録・石器入門辞典<縄文>」柏書房
- 瀬川祐市郎・山本恵一 1988 「考古資料（2）鳥谷・大芝原」沼津市歴史民俗資料館資料集6
- 高尾好之 1988 「土手上・中見代第II・第III遺跡発掘調査報告書」沼津市教育委員会
- 寺内隆夫 1984 「角押文を多用する土器について」『下総考古』7
- 鳥羽嘉彦 1987 「石器石材の選択性」『平出遺跡考古博物館歴史民族資料館紀要』第4集  
塙尻市立博物館
- 長野康敏・伊藤恒彦 1989 「函南スプリングゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘調査報告書（1）」  
函南町教育委員会
- 仲谷三千彦 1998 「徳倉B遺跡」勘定岡県埋蔵文化財調査研究所
- 平林将信 1975 「西願寺遺跡（B地区）—縄文時代中期 勝坂期の住居址等について—」  
静岡県長泉町教育委員会
- 平林将信 1984 「天間沢遺跡I 遺構編」富士市教育委員会
- 平林将信 1985 「天間沢遺跡II 遺物・考察編」富士市教育委員会
- 広瀬政信・鈴木敏中・片平剛 1991 「夏梅木遺跡群」—三島市夏梅木地区宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査概報— 三島市教育委員会
- 藤森栄一 1965 「井戸戸」中央公論美術出版
- 町田勝則 1996 「石器の研究法」「長野県の考古学」勘定長野県埋蔵文化財センター研究論集I
- 松井一明 1984 「長者平遺跡」袋井市教育委員会
- 松井一明 1992 「袋井市長者平遺跡」袋井市教育委員会
- 松本一男 1992 「中原遺跡発掘調査報告書」掛川市教育委員会
- 三上徹也 1986 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」  
『長野県考古学会誌』51
- 森本伊知郎 1985 「勝坂式土器の文様構成について」『信濃』37-4
- 山内昭二 1968 「千枚原遺跡発掘調査概要」三島市教育委員会
- 山本恵一・仲家三千彦・前田友子 1993 「二ツ洞遺跡（b・c区）発掘調査報告書」  
沼津市教育委員会

## 謝 辞

本書をまとめるにあたり、今福利恵氏（山梨考古博物館）、鈴木敏中氏（三島市教育委員会）に細かな助言、御教授を賜った。文末ながら心より感謝の意を表したい。

# 写 真 図 版



遺跡の近景

図版2



SB-1 完掘状況



SB-1 炉残存状況



S B—2 完掘状況



S B—2 炉残存状況

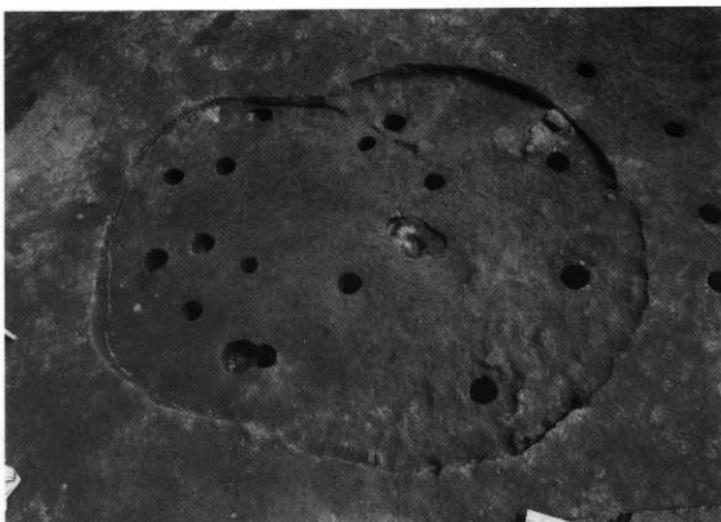
図版 4



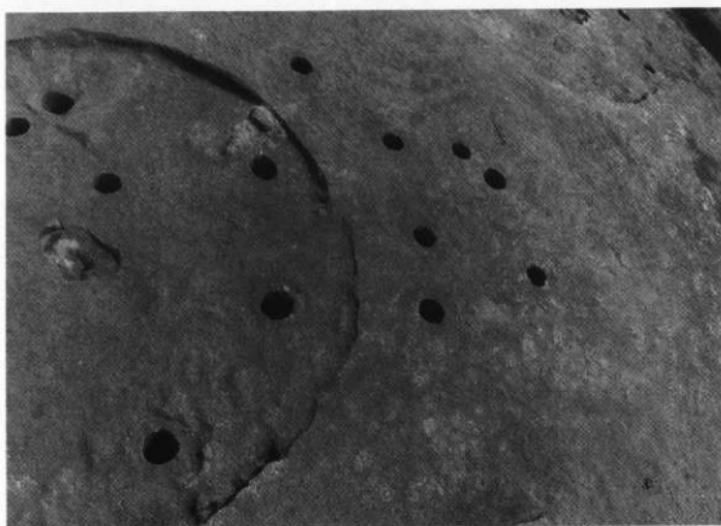
S B - 3 · 4 完掘状況



S B - 3 炉残存状況

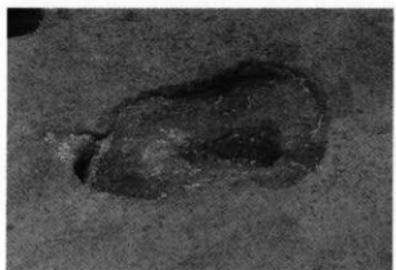


S B-5・6 完掘状況



ピット群2

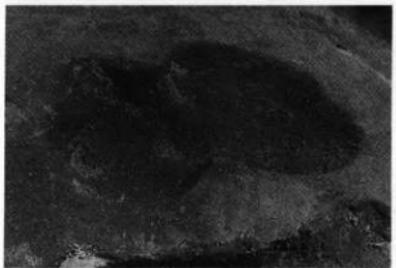
図版 6



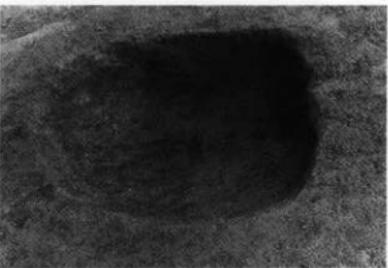
S B-6炉残存状況



ピット群 1



S X-2炉



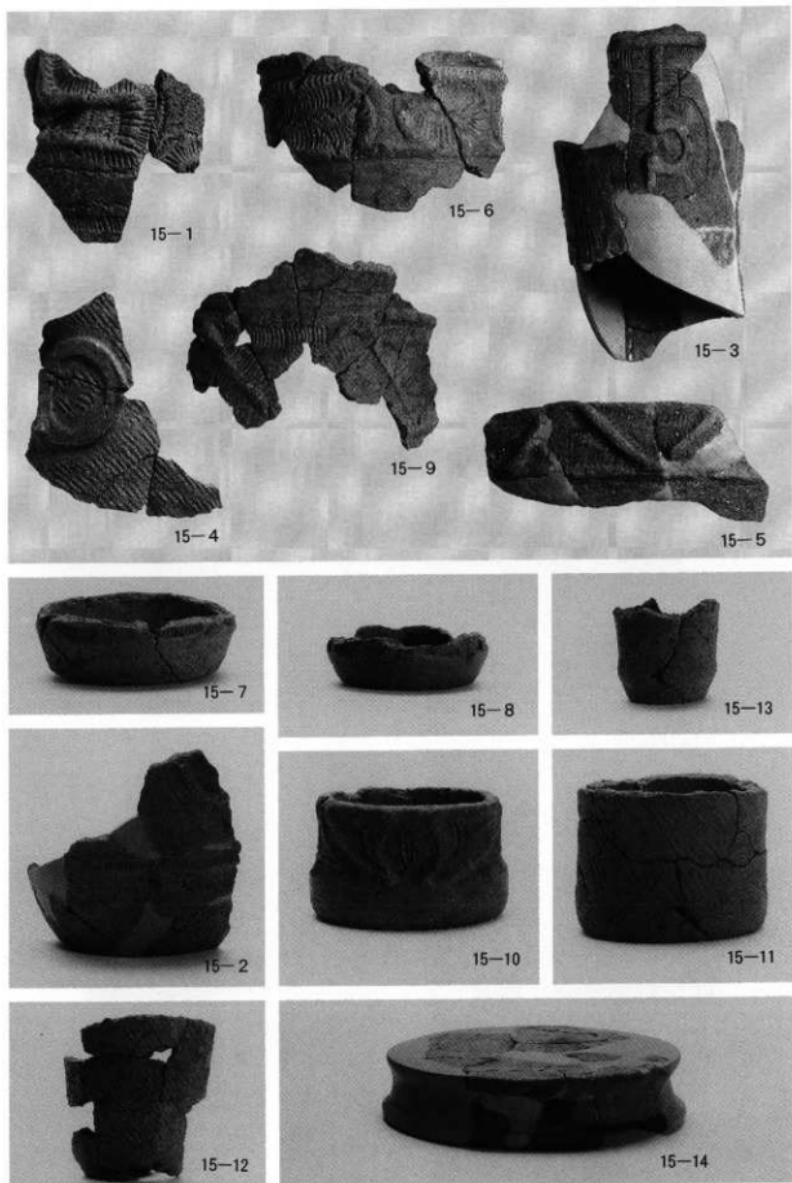
S X-3炉



遺物出土状況 1

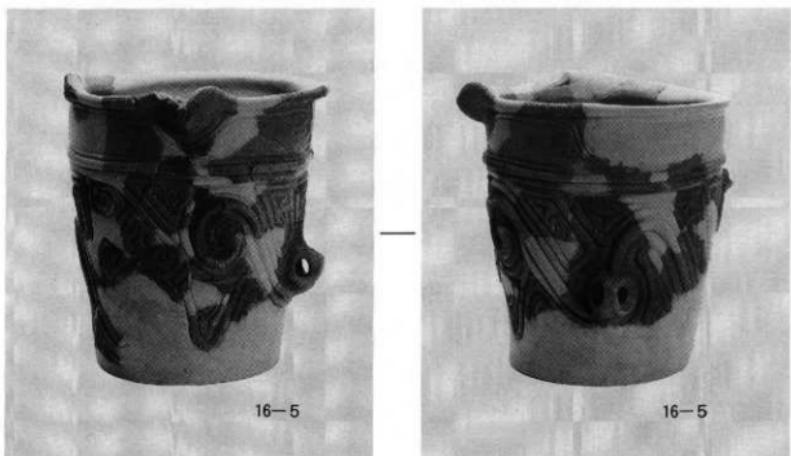
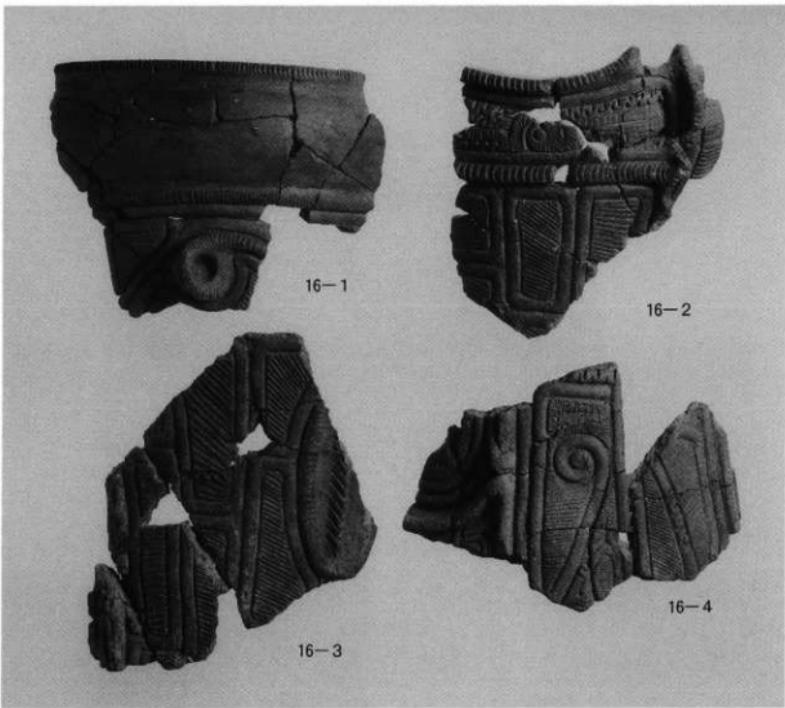


遺物出土状況 2

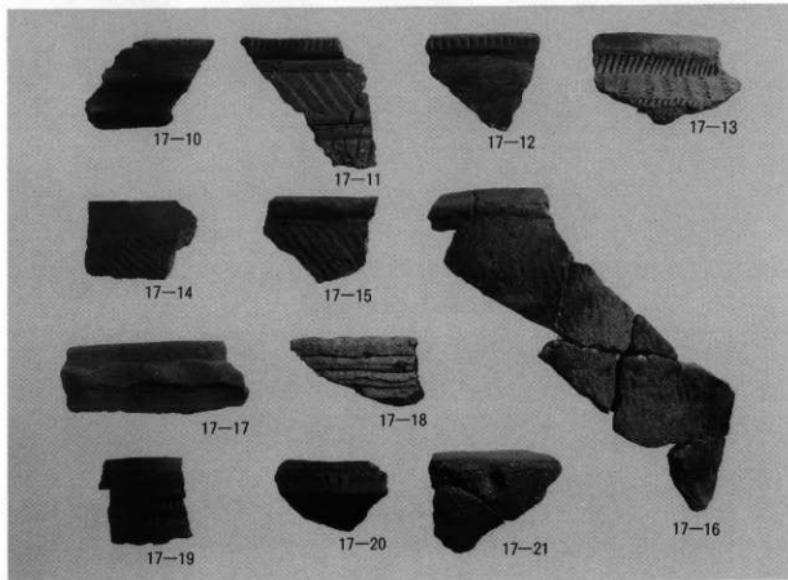
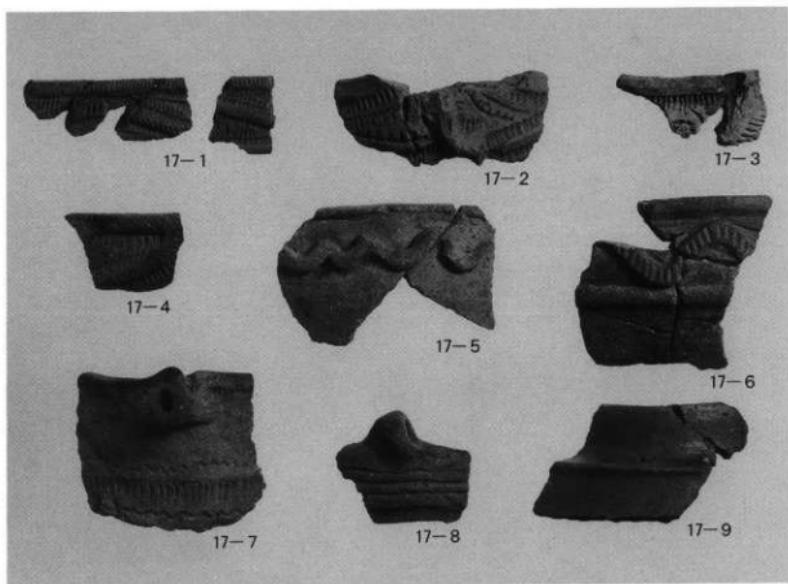


縄文時代中期中葉の土器 1

図版8

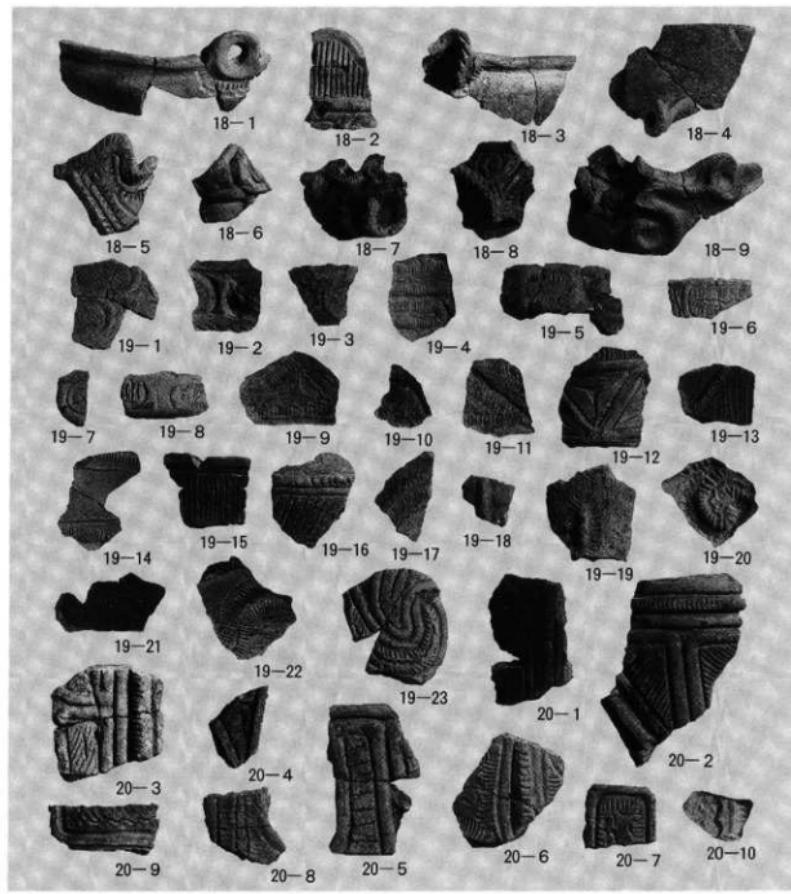


縄文時代中期中葉の土器 2

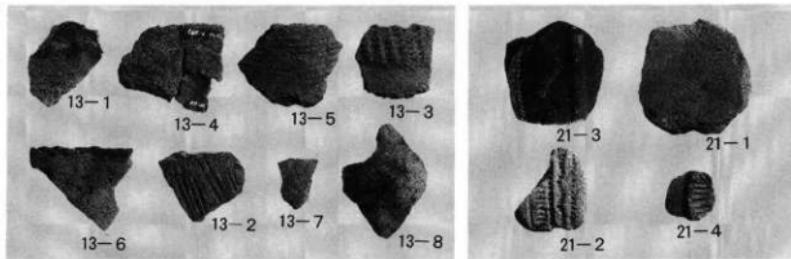


縄文時代中期中葉の土器3

図版10

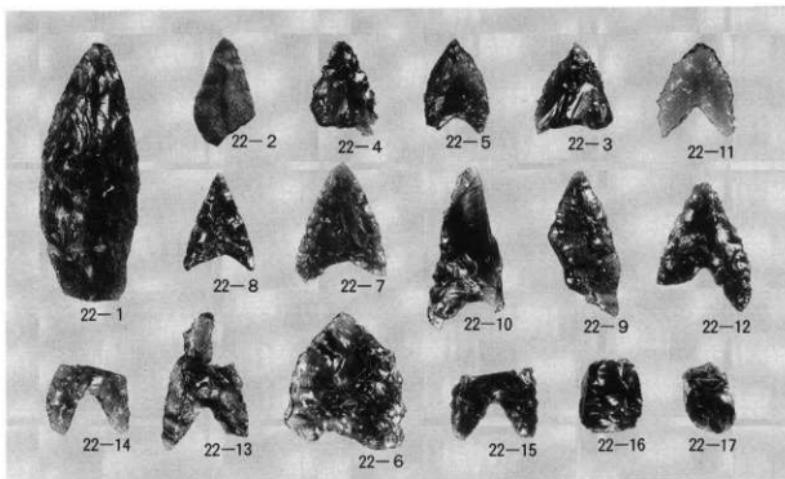


縄文時代中期中葉の土器4

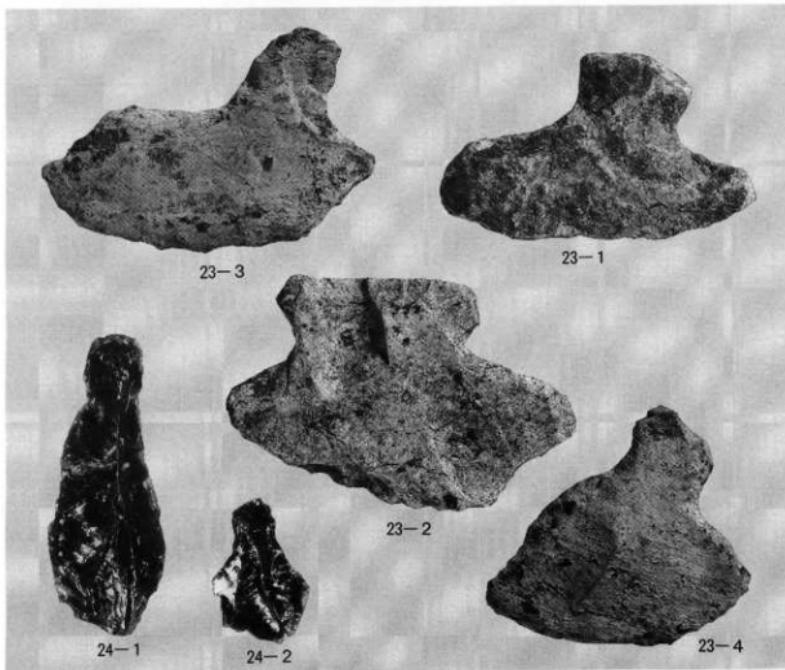


縄文時代早期・前期の土器

土製品

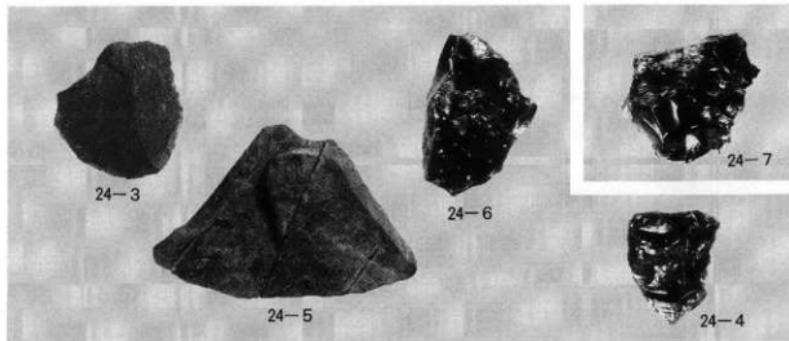


尖頭器・石鎌

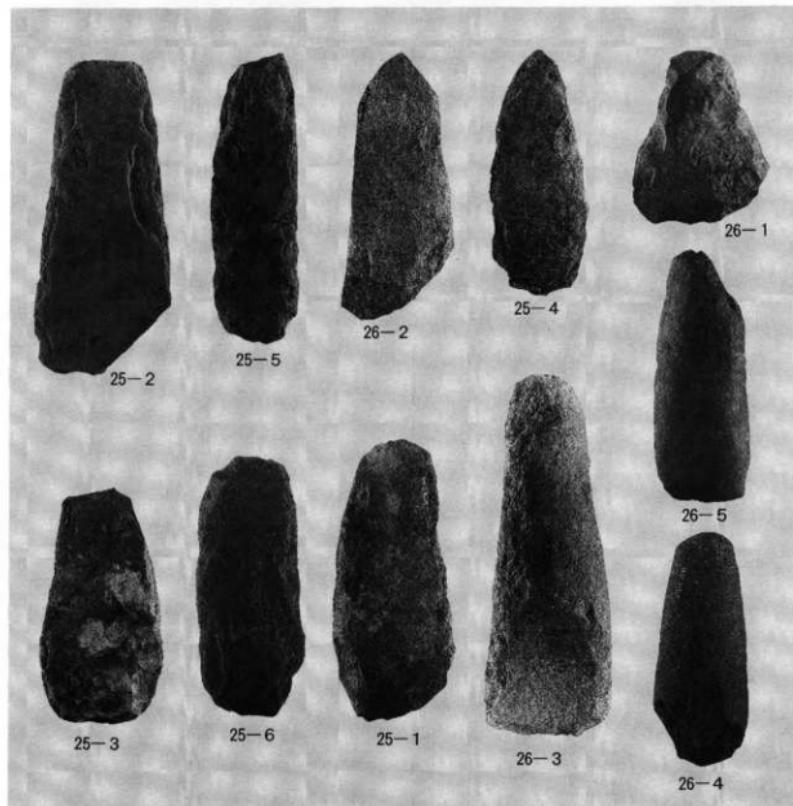


石七

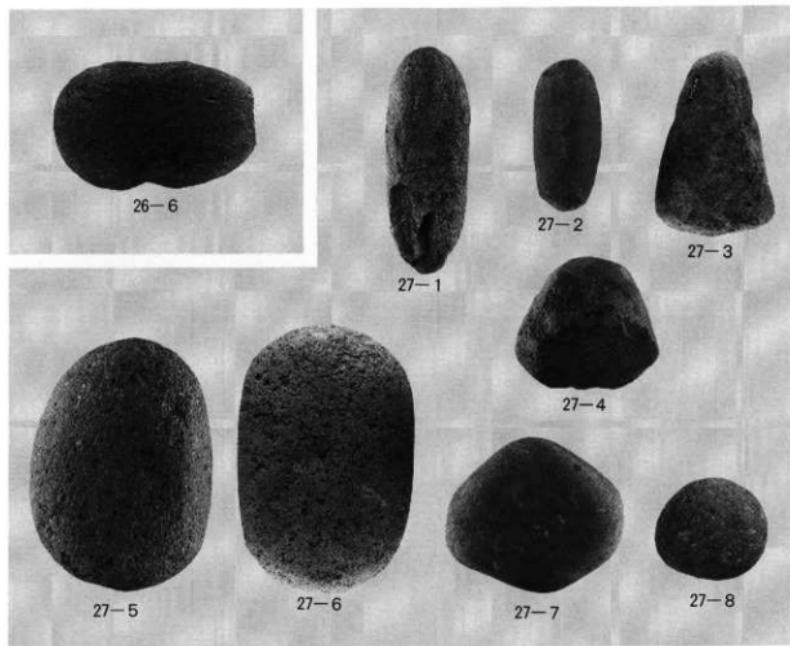
図版12



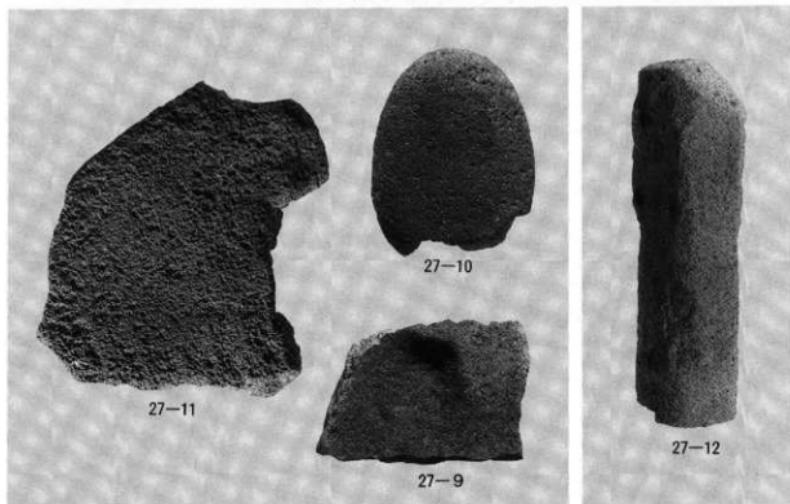
スクレイバー類・石核（右上）



石斧



磨石・核石・石錐（左上）



石皿・石棒

図版14



**発掘調査参加者**

安部正人

太田光次 岡野 一

加藤博正 喜多村 清 小出寛治

後藤 馨 下山 貢 濑戸 茂 武士晴信

富永 保 中津雅俊 松田 稔 吉田友彦 小畠幸代

加藤直美 重信美知子 高遠美幸 田中君子

津々野詩織 中村秋枝 新島文子

平光陽子 湯川由巳

横田睦子

**整理作業参加者**

栗木 崇

小畠幸代 加藤直美

重信美知子 高遠美幸 津々野詩織

湯川由巳 横田睦子

**遺物写真撮影者**

斎藤 晋

**石材同定者**

森嶋富士夫 (技術作業員)

**土器・石器観察表作成者**

栗木 崇 (技術作業員)

**〈調査協力者〉**

今福利恵 (山梨県立考古博物館)

鈴木敏中 (三島市教育委員会)

## 報告書抄録

ふりがな	きたのいりエーいせき					
書名	北ノ入A遺跡					
副書名	平成10年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書					
シリーズ番号	第118集					
編著者名	井上 隆・栗木 崇					
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所					
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261					
発行年月日	西暦1999年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯/東経	調査期間	調査面積	調査原因
北ノ入A	静岡県三島市 御倉845-1	22206	35°08'55" /138°55'00"	1998年4月 1998年12月	498m <sup>2</sup>	道路建設 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
北ノ入A	集落跡	旧石器時代 縄文時代早期 縄文時代前期 縄文時代中期	住居跡、炉、 ピット群	尖頭器 縄文時代早期～前期の 土器 土器、石器、楔形石器、 石匕、スクレイパー、 石核、打製石斧、磨製 石斧、石鎌、敲石、磨・ 敲石、磨石、石皿、石棒	縄文時代中期 勝坂期の住居跡	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第118集

## 北ノ入A遺跡

平成10年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成11年3月31日

発行所 財団法人  
静岡県埋蔵文化財調査研究所  
静岡県静岡市谷田23-20  
TEL (054)262-4261(代)

印刷所 みどり美術印刷株式会社  
沼津市沼北町2丁目16番19号  
TEL (0559)21-1839(代)